上に付いているモニタを立ち上げて、横から上に向けて、何やら棒をおっ立てた。同時に森本美愛が手早く後部座席のカーテンを引いた。
「光が外に漏れないようにな」
《スペース・アトラス社》の裏口で張っていた奴らが先行して家の様子を探っている。
報告では、まだシャワーを浴びているらしい。
しばらくすると、出たという報告があった。
「さーて、覗いちゃうかな〜」
河本のおっさん、嬉しそう。エロ親父め。
と思っていたら、写ったのは、パソコンによく出る窓マーク。
起動中らしく、画面が目まぐるしく切り変わっていく。
とうとうログイン画面が出てきた。ＩＤにファインアントって書いてある。
はあああああ？　なんでテロリストの女の名前が目の前のモニターに入ってんだよ。
誰も何もいじってないのに、パスワードの黒丸が増えていって、完全に立ち上がった。
……覗くって言ってたよな。もしかして、見えてるのは……。
「モロミトスのパソコンのモニターが見えてる……」
俺がポソっと呟くと、魚石さんが、
「モニターからは電磁波が出ているんで、これを解析すると元の画面に戻せるんですよ」
って、丁寧に教えてくれた。なーるほど。
ってか、こりゃ、プライバシーってもんがねぇじゃねぇかよ！
もう、「はあ、そうですか」としか言いようがない次元の話だ。べっくらしたね。
モニターの大きさによるけど、数百メートルの範囲で受信して見られるらしい。防御するには電磁波を完全に封印できるような金属の箱に入らないとだめなんだと。
そんなん、そう簡単に防ぎようがねぇじゃんよ。参ったね。
「さぁ、立ち上げちまえ」
河本のおっさんが言っているうちに、画面に表が出てきた。
数値が一秒ごとに変化しているのが二列ある。で、あまり動いてない数字が一列ある。全部で十三行あって、そのうちの二行が空欄になっていた。
「これだ」
これって、もしや？
「やつらの上げた衛星の現在地だろうな。通信衛星にぶつけた二機が空欄になっているところからしても、確実だなぁ」
動いている数値が緯度と経度、動いてない数値が高度を表しているらしい。
河本のおっさんは携帯電話を取ると、
「確保」

とだけ、短くはっきりと言った。嫌がおうにも、俺の呼吸が速くなるのがわかった。
すっと、森本美愛が立ち上がり、車から出て行った。
逃がしちゃいけねぇ。美愛が何をするのか、この目で見るために来たようなもんなんだぜ。
従いて出ていこうとしたら、河本のおっさんに、がっちり首根っこ掴まれちまった。
「お前は、こっちだ。マネキンのように盾になれ――とは言わないが、下手に動くんじゃねぇぞ」
だってさ。畜生。
言うこと聞かないと、マジで日本の土を踏めなくなっちまうからな。
できる限りおとなしくしとこう。できる限りだぜ。そんときゃ、そん時だ。

10

俺は、河本のおっさんと一緒に玄関口に回った。
河本のおっさんは胸ポケットから、細い先の曲がった金属の短い棒を取り出すと、カギ穴に入れて、カチャカチャとやり始めた。
おい。それは、ピッキングというやつじゃねぇのか？
完全にアウトローだ。なんてぇおっさんだ。
十秒もすると、カチャンという音がして、鍵が開いちまった。
こんなに早く開いちまうんじゃ、鍵の意味なんて全然ねぇな。
がちゃっと開けると、さすがにアメリカン。中からチェーンで止められていた。
すかさず魚石さんが大きなニッパで、ぶった切った。こちらも、迷いが一切ない。
「入るぞ」
掛け声に合わせて、一歩ささっと入る。
観葉植物が所狭しと置かれていた。天井には蔦系の植物までもが這っている。蔦に混じって、プロペラの扇風機が、ゆったりと回っていた。
部屋の片隅に白いテーブルとリクライニング・チェアが置いてあって、居心地よさそうだった。
こういう趣味なんだ。いいとこ住んでるな。意外。
俺が周囲を見渡している間に、二人は奥の部屋に入って行っちまった。
慌てて追いかけると「誰よ！」というモロミトスの鋭い声が聞こえてきた。
部屋の戸口に、河本のおっさんと魚石さんが立っている。
なっ！　おっさんズは、なんて格好してるんだ！
いつの間に用意したんだか、おっさん二人は頭にキラキラの三角帽を被っていた。
「とっとっと、サプラ～イズ！」
パンパ～ン！
クラッカーなんか鳴らしたりしちまっている。

ここはアメリカだぜ。銃の国だぞ。撃たれたって、文句は言えねぇのに、なんでそんなに陽気で能天気なんだよっ！　馬鹿じゃねぇの？

ひょっとして、これが作戦？　作戦として成立してるのか？

大体、おっさん二人がそんな浮ついたことやったところで、だ～れも喜ばねぇぜ。特に『子猫ちゃん』好きのモロミトスはな。

二人の間から覗くと、バスローブを纏っただけのモロミトスが、立ち上がって固まっていた。大きく開いた口が、引き攣っている。

薄暗い照明の中に、分厚い木でできたデスクがあった。周囲にはアンティーク調の家具が鎮座している。シックな花柄の壁紙と本棚が壁一面を覆っていた。

リフォームしたんだろうな。ピンクか赤のどぎつい色の部屋を想像していたから、まことに意外だった。

と言っても、後から寝室を覗いたら、赤と白のド派手なベッドにクマの剥製があったんだけどな。意味わかんねぇ。

机の上には、テキーラの瓶と氷の入ったグラスにノートＰＣ。

モロミトスはシャワーの後で、ゆったりくつろいでいるところだったんだろう。これから、のんびり一杯やろうってとこか？

モロミトスを実際に目の前で見ると、俺の中で、沸々と怒りが滾ってくる。

どこだか皆目わかんねぇ地下室でやられたことが、頭をよぎった。

二人を押しのけて、思わず先に行こうとしちまった。どけよ。行かせろよ。

ま、二人とも、でかい岩みたいに動いてくれなかったんだけどな。

まぁ、今、面の割れてる俺が出て行っちまったら、計画が台無しになっちまう。

このときは、そんなこと、てんで考えられないくらいに、血で頭がぱんぱんだったわけだ。

モロミトスは、ただの強盗だと思ったらしい。

河本のおっさんは、

「あなた、幸運な人ですぅ」

「十万人のうちの一人ですぅ」

とか訳わかんない戯言（たわごと）言ってやがったけどな。

これじゃ、ただのおかしな奴じゃないか。

モロミトスは、こっちでの押し合いへし合いの小突き合いにも、まるで気づいていない様子だった。

ロケット絡みと思われるより、強盗のほうが何万倍もいい。

変に対策を取られないからさ。

モロミトスは、河本のおっさんのアホな言葉を相手にするよりも、招かれざる『おっさんズ』が家の中にいるという事実がどんな意味を示すのかを、優先させたらしい。

ま、賢明な判断っちゃ、賢明だな。

「金なら、持って行きなさいよっ！」
モロミトスは叫びざま、机の裏から拳銃を右手で取り出し、俺たちに向けた。同時に左手で百ドル札の束を三つ投げつける。
一つの札束が上から垂れ下がっている照明に当たって、封が切れた。ばさばさっと紙吹雪になって舞い落ちる。
なんて豪勢な。初めて見たぜ、札の紙吹雪。
「充分だろっ！　帰んな！」
紙吹雪の向こうから、モロミトスの鋭い声が銃弾のように突き刺さる。
何と豪気な。バスローブ一枚で見知らぬ男と対面して、この勢いかよ。
紙吹雪が収まると、思ってもみない光景が見えた。
モロミトスは椅子に座って、ノートPCを触ろうとしたまま、固まっていた。
さっきの勢いは、どこへやら。
顔には驚きが貼りつき、口は半開きのまま呆然としている。
その傍らにいた人物は、どこから入ってきたのか、モロミトスの蟀谷に拳銃を突きつけた森本美愛だった。
へ？　いつの間に？
森本美愛は、何でもないかのように無表情だった。
森本美愛はモロミトスの耳元で何やら囁く。モロミトスの顔色が一気に青くなり、目が大きく見張られた。
何、喋ったんだ？　モロミトスの様子が変だぜ。
モロミトスがオドオドと森本美愛を見ようとした瞬間、森本美愛はがっと拳銃のグリップでモロミトスの蟀谷をブン殴った。
ガシャンと机の上に崩れ落ちるモロミトス。モロミトスの手からは、拳銃がこぼれおちた。
皮膚が切れたんだろう。蟀谷からは赤い血が一筋、たらーりと垂れていた。
血だ。
美愛が攻撃したんだ。なんの躊躇いもなかった。
血だ。やべぇ。血だ。流れてる。
初めて、帯になって流れる血を見た。
恥ずかしいことに、一歩ぎょぎょっと後ろに下がっちまった。
血を見たら、狂っちまう。そうだろ。自分の親父がそうなんだ。血を大量に見て、戦闘の興奮状態で狂戦士（バーサーカー）化しちまうんだ。
やばい、やばい。あいつと一緒になっちまう。
……おかしいな。俺、あんまり興奮してない。
大量の血を見たら、すぐに激昂して狂うのかと思ったのに、別になんともなかった。

この程度じゃ、スイッチは入らないのかな？　もっともっと、大量の血が必要なんだと思う。
だから、親父の奴、戦争じゃないと、快楽を感じないのかもしれねぇ。
それにしても、美愛の奴、何を考えて殴ったんだろう。
でも、これが現実だ。
それ以上のこともやってるかもしれない。
そうか。本当に、そうなのか。
俺の中には不思議と「そうですか」と納得いく自分がいた。
やっぱり、美愛は美愛だ。まるっきし変わらねぇ。

「よくやった」
すかさず森本美愛がモロミトスを椅子から下ろして、手際よく縛り上げた。
机のＰＣからできるだけ離れたところまで、ぐいぐい引きずっていく。
これだけされても何も抵抗しないところを見ると、完全に気を失ったらしい。
そうだろうとは思っていたけど、美愛って、すげー遣り手なんだな。
てことはだよ。なんだ？　おっさんズは、囮かよっ！
そりゃ、森本美愛の後に従いていこうとしたら、止められるわな。
仕返ししようと思って近づこうとしたら、河本のおっさんが、手のひらをこっちに向けた。
止まれって意味らしい。俺、まだ部屋に入ってもいねぇんだけど。俺は手をぎゅーっと握りしめるだけで、我慢した。
目の前にいるのに、何にも仕返しできないなんて。
ギリギリと歯ぎしりしながら、横倒しにされたモロミトスを改めて睨みつけた。
おふぅっ！
モロミトスは、ヤバい格好になっていた。バスローブが乱れて、きわどい格好になっている。
捲れた裾が、目にヤバい。うほっ！
どうしても目が裾の分かれ目に行っちまう。
頭に血が上っているが、余計なところにも血が集まっちまいそうだ。
こんなときなのにな。俺って馬鹿かも。健全なんだよっ！
と思ったら、河本のおっさんはモロミトスの腰の前にしゃがみ込むと、手を前に伸ばした。
俺からは、おっさんの背中が邪魔して、何してるのかが見えない。
何してんだ？　裾を直してやってるのか？
と思ってたら、
「やっぱり、ノーパンだ。髪の毛の色、染めてるな」だってさ。
ぬわんだって！　ノーパンっ！
おっさん、覗きやがったのか。直すどころか、捲ってたなんて。

染めてる？　てことは、下のおけけ、見たんだ……。
こっちゃ、聞いただけで鼻血が出そうになっているっちゅうのに、やっぱり河本のおっさんはオジサンだった。
絶対に電車の中で平気な顔して、エロ紙面の裸のねーちゃん眺めて、エッチな文章を読めるタイプだ。
女の森本美愛がいるんだから、やらせりゃいいのに、河本のおっさんは「時間がもったいない」だの「身体検査が必要だ」とか言い張って、胸元のあたりも、ごそごそやっている。さりげなく、触ったりもしているらしい。
畜生。
魚石さんも気になるようで、見ない振りして視線をちらちらと、モロミトスのほうに移動させている。
すんげー嬉しそう。あーあ、顔が輝いちゃってるよ。
「若者には、まだ早い」
くっそぉ。こっちからじゃ、河本のおっさんの背中しか見えねぇ。
かといって、覗き込みに駆けつけるのも、なんだかな。
拷問された地下室での生乳の光景を思い出して我慢するしかないのかよぉ。
妄想の中では肝心なところがまーるく消えてる女体。悲しいぜ。
俺は右にずれたり、左にずれたり、伸び上がってみたりして、懸命の努力をしてみた。
けれど、おっさんの背中しか見えない。
ん？　……何か、嫌な予感がする。
はっとなって、美愛の扮する森本を見た。
森本美愛はＰＣをいじる手を止めて、俺の顔を、じとーっと見ていやがった。
やっべ。裸体の衝撃に、すっかり美愛の存在を忘れてた。
時間がないんじゃなかったのかよ……。
後で、どんな制裁が待っていることやら。
森本が美愛だってことを論破できたらだけどな。しなきゃならねぇんだけど、こりゃ、できないほうが、幸せかもしれん。……なんちって。

１１

「解析できました」
森本美愛は、ひとしきり俺にガンくれると、気が済んだのかどうかわからないが、作業に戻った。
次に顔を上げたのは、二十分後だった。
森本美愛が言うには、世界各地にアンテナがあって、このＰＣで全ての小型衛星の制御ができるらしい。
ただし、制御できるのは、このＰＣからだけとは限らない。

モロミトスが何か指令を出すとか、モロミトスに何かあると、世界中にあるだろうバックアップ要員が衛星に指令を出せるシステムになっているかもしれない、ってことだ。
ＰＣのＬＡＮ回線の裏には、どんなトラップが仕掛けられていることやら。
小型衛星の大きさは、美愛の作ったものの二倍。結構でかい。
「ん……」
河本のおっさんが、モロミトスのほっぺたを、軽くペチペチと叩く。モロミトスが小さな声で呻きながら、目を覚ました。
最初は視線も定まらず、ぼーっとしているようだった。
だが、自分のＰＣをいじられているのを見て、一気に眠気が吹っ飛んだようだった。
「何をしているのっ！」
モロミトスは慌てたように体を捩って、手足をほどこうとする。
「あんたたちにわかるようなものは、入ってないわよ！　ＰＣから手を離しな！」
「さあてね」
モロミトスは、まだ俺たちが誰だかわかってないみたいだった。まだ強盗だと思ってるんじゃねぇかな？
もう、俺が出ていってもいい頃合いだ。
河本のおっさんが、こっちに来るように手招きしている。
「よぉ」
軽い挨拶をくれてやった。怒りで声が震えないようにするのに、精いっぱいだったけど、なんとか普通そうにできたつもりだ。
モロミトスの視線が俺で止まり、顔全体を、驚愕が支配した。
顔じゅうに「そんなバカな」って書いてあるよ。何が何だか皆目わからねぇんだろうな。しきりに頭を振っていたよ。
「あの愚かなジャパニーズ・ボーイが？　何で？　どうやって、こんなすぐに、こんな人数を連れて来れるの？」
スチューピッドとか、言うんじゃねぇっ！　しかも、心の底から言ってるみたいだしよ。
火に油って、こういうことを言うんだ。
かっとなって、俺はモロミトスの腹を思いっきり蹴っ飛ばした。女だからって、もう手加減なんかしてやらねぇ。親父と一緒になっちまうかもなんて、すっかり忘れてた。
ドガッ！
俺の蹴りは、しっかりとモロミトスの鳩尾に入った。
けっ！　やり返してやったぜ。ちょっとすっきり。
遊んでくれて、ありがとよ。
モロミトスは体を折り曲げて、ごほっごほっと咳き込みながらも、なおも続ける。

「あんたたち、日本人ね。日本は世界一気概のない玉なし国家だって言うから、落してやったのに。ステイツが来る前に、来るなんて……」
それで日本の衛星を狙い撃ちしてたのか。完全に俺たちを舐めきってんな。情けねぇ。
「ありがとさん。けどな、中にゃ、玉のある奴もいるんだよなあ」
河本のおっさんは、どこまでも飄々としている。だけど、頭の上の三角帽が載ったままじゃ、いまいち、凄味がねぇよ。
閻魔さまの前でも、そうなのかね？
「ちっ。どうせ、無駄よ。世界中に同士がいる。あたし一人、とっ捕まえたところで意味ないわ」
「そりゃ、どうだかね」
「セット完了」
モロミトスの会話を、森本美愛の声がぶった切った。
森本美愛は手元に持ってきていた手のひらサイズのパソコンで軌道計算をしていたらしい。日本で把握している全ての衛星が入力されている。
「な、何のセットよ？　ちょっと！　触るんじゃないわよっ！」
「ふざけたねぇちゃんに、見せてやるか」
森本美愛はモロミトスにモニターが見えるように、ＰＣを傾けた。
画面を見たモロミトスには、一瞬で何が起こっているか、わかったらしい。
突然、狂ったように汚い四字言葉を喚きながら、暴れ始めた。
「この野郎」
モロミトスは、この世の終わりかのように、体をくねらせて逃れようともがく。弾みで両手を縛っていた紐が取れちまった。
おいおい。真面目に縛ってたのかよ。
モロミトスは、自由になった両手で近くにあった観葉植物の鉢を持ち上げようとした。
させるかっ！
俺は無我夢中でモロミトスに突っ込んでいった。頭の中は真っ白。
観葉植物の鉢を蹴って、その辺に転がすと、モロミトスに馬乗りになった。
そうでもしないと、何するかわからねぇ。足もじたじたさせようとするから、河本のおっさんが押さえたらしい。
にしても、すんげー馬鹿力。バスローブの上からじゃ、つるつる滑って、うまく抑えられねぇ。
おとなしくしやがれ。
魚石さんが拳銃で牽制する役目なんだけど、全く牽制になってねぇ。
モロミトスは、撃たれたってどうでもいいって感じで、もう捨て身なんだ。そんなにＰＣが大事なんだろう。
けどな、実は、こっちは撃てねぇんだ。

だって、撃ったら、でっかい音で、周囲の家にばれちまう。お忍びだから、撃てねぇんだよ。見せしめに空砲を撃つこともできねぇ。
そうこう梃子摺っている間に、バスローブがずれて、合間から、ちらりと見えちまった。
何がって？
胸についてる、お山のてっぺんさ。
ぱっぱかぷっぱっぺー。
心の中でラッパが高らかに鳴り響く。やった！　やった！　ついにやったぞっ！
初めて見たんだ。
ほんの一瞬だったけど、脳内メモリーに、しっかり焼きつけたぜ。
本人が言った通り、大きすぎず、小さすぎず、綺麗なお乳だった。
「見えた」
って、モロミトスに言ってやったら、顔じゅう真っ赤にして怒ってたな。わっはっは。
最悪の気分だろうな。おちょくりまくったやつに、やられるなんてさ。
ゴチン。
いてぇ。
調子に乗ってたら、でこにモロミトスの頭突きをくらっちまった。
すんげー、石頭。火花が散ったね。
その間にモロミトスは、河本のおっさんを縛られた足で蹴ると、上に乗ってる俺を振り落とそうとした。
すんげー馬鹿力。多分、火事場のって頭に付くんだろうけどな。
俺は必死で掴まった。けど、ぐらんぐらん揺さぶられる。
俺の肩が、机の抽斗の端に当たっちまった。ドンっていう鈍い音がする。
くわっ。肩がいてぇ。
机に当たった衝撃で、何かが机の上から落っこちてきた。
何だ、これ？　石鹸箱ぐらいの大きさのプラスチックの箱に、赤い丸いボタンが付いている。
いかにも「押してください」的な。
「はははははは」
モロミトスが突然、笑い始めた。
「これでおしまい。ちょっと予告よりも早くなったけど、ありがとね。おバカなジャパニーズ・ボーイ」
くっ。何だっていうんだよ。また、俺の知らない何かがあるのかよ？
「やめさせろっ！」
河本のおっさんが、声を荒げた。初めて聞く河本のおっさんの怒声だった。
は？　だから、何なんだよ、これ？
よく理解できない、その一瞬の間が、仇になっちまったんだ。

俺がスイッチを弾く前に、モロミトスは自分の顔の近くに落ちてきたスイッチを、顎で押しちまった。
カチッ。
「あああああ」
河本のおっさんと魚石さんから、漏れ息のような嘆きがこぼれてきた。
「やったやった。このスイッチさえ押せれば、十分だったのよ。もう殺されない」
モロミトスは俺たちを乗せたまま、もう暴れることなく、ただ笑い続けていた。
何のことだ？　殺される？　その前に、何のスイッチなんだ？　やばいのか？
河本のおっさんは頭を抱えて、
「終わった……」
と、気の毒なほどに肩を落としている。
「多分、そのスイッチは押しさえすれば、全部の衛星が他の衛星に衝突することになってるんだろう」
なっ！　てことは、俺たちは失敗したのかよ。これで衛星軌道は使えなくなっちまうってことか？
俺は、のろのろとモロミトスの上から降りた。
あのとき訳わからなくても、声に反応して体が動いていれば。スイッチをちょっと遠くにやるだけで良かったんだ。ほんの十センチメートルの話だったのに。
やっちまった。終わった……。やっぱり俺は、スチューピッドなのかよ……。
畜生、畜生、畜生。
「あんたたち、楽しいことが待ってるわよ。いっひひひ。空っぽの爆弾なんて楽なこと、させてやらない」
モロミトスは横座りになって上半身を起き上がらせると、勝ち誇ったように、ノートＰＣのモニターに再び目をやった。
「何これ？」
モロミトスの顔が、見るみるうちに真っ赤になる。
「何よ、何よ、これっ！」
モロミトスはノートＰＣをガタガタ揺さぶった。
ん？　なんか、様子が変だぞ。
モロミトスの後ろからモニターを覗いてみると、十一行の全ての高度を示す数字が小さくなっていっていた。
高度が下がる。
すなわち、十一個の衛星が大気圏に向かって落下中。
森本美愛は大気圏へ再突入する軌道を設定してあったんだ。再突入すると、流れ星になって燃え尽きちまう。
高度百キロメートルを切ったものから、赤字になり、アラート音を出して、消えていった。
「なんで、なんで、なんで？」

モロミトスは燃焼しつくしたかのように、へたへたと座り込む。
「プログラムを組み直したの。そのボタン押したら、大気圏に落ちるようにね」
森本美愛の声は、どこまでも淡々としていた。
そんな工作もしてたのか。こりゃ、分室で重宝されるだろうな。
河本のおっさんが自分のペースを取り戻したようで、のんびりと、
「自分の手で落としちまったんだなぁ」
「あたしが、この手で……」
モロミトスは「そんな、そんな……」と、譫言のように呟いている。目は面白いように虚ろで、視線がふよふよとさまよっている。
よっぽどショックだったんだな。てか、当たり前か。
「一件落着。んじゃ、このねぇちゃんを参考人として連れていくぞ」
「あはははははは」
突然、モロミトスが笑い始めた。声が上ずっていて、正気の沙汰とは思えない。
「連れて行って、どうするつもり？　匿えると思ってるの？　無駄よ、すぐに殺される。それに、一件落着だって？　あっはははははははは。おめでたいわね。まだ、終わってない。でっかいのが、まだ残ってるわよ。指を咥えて見てればいい。ざまー見ろだわ」
まだ残ってる？　何が？
俺たちは、みんな一斉に森本美愛を見た。森本美愛は狼狽したように、
「そんなはずない。このＰＣに入ってるのは全てチェックしたわ」
「まぁいい。絶対に吐かせるぞ。とにかく、このねぇちゃんに服を着せて、ずらかるぞ」
てなわけで、俺たちは東京にとんぼ返りする仕儀になった。
帰りの飛行機じゃ、モロミトスの奴、付き添いは女にしろとか、若い娘にしろとか、ワインが安いとか散々に文句を垂れ捲っていやがった。
おいおいおい。もっとしょぼくれてろよ。
自分の立ち場を思い知れってんだ。
よっぽど自信があるんだろうな。最後の隠し玉にさ。

１２

二〇一Ｘ年五月二〇日午後一時@成田空港。

俺は内心かなり焦っていた。
モロミトスの言っていたでかい目標に心当たりがあった。一番大きな衛星。
国際宇宙ステーションだ。あそこには俺の叔父さんを含む、六人の人間が滞在している。

ある意味、絶好のターゲットだぜ。
だけど、未だに避難する様子がないらしい。ニュースを検索したけど、そんなニュース全然なかった。
叔父さん……。
大丈夫かよ……。

もう一つの懸案。
このままでは、森本っておばさんが美愛だって、証明できないで終わっちまう。
東京に戻ったら、また会えるかなんて、皆目わからねぇ。
タイムリミットが迫ってるんだよ。
どうしたらいいんだ。
帰りの飛行機でも、すごいきっつい香水の匂いにもめげずに、隣に座ったってのによ。
森本美愛の奴、ずっと寝っぱなし。
ついでに、疲れが出たんだろうな、俺も寝っぱなし。
あーあ。
俺は気がついてたんだ。美愛の扮する森本が、たまーに寂しそうな顔をするのを。
なのに、本人が正体を明かすのを望んでいないみたいだから、たちが悪い。どう攻略しろってんだよ。
でも、そんなの間違ってると思うんだ。だって、もともとは誤解なんだからよ。
ガシャン。
何だ？　何か足に当たったぞ。
八方塞がりだという思いで頭がいっぱいで、前を良く見てなかった。俺は何かを引っくり返しちまったらしい。
大きな音を立てて、掃除用のモップ洗いが横倒しになっていた。
やっべ。ズボンが濡れちまった。タオル、タオル。
俺は、掃除のおじさんのあからさまな迷惑顔に平謝りに謝りながら、鞄を開けようとした。
「はい」
すっと俺の前にハンドタオルが差し出された。
誰だろうと思ったら、森本美愛だった。久しぶりの親切。
というか、森本として俺の前に現れてから、初めての親切だった。ま、要するに、ずっと鹿十されてた訳で。
「サ、サンキュ」
俺は、戸惑いと嬉しい気持ちでじんわりするのと半々な気分で、受け取った。
あれ？　足がはみ出てる。
森本美愛がスカートの左ポケットからハンドタオルを出したときに一緒に飛び出ちまったんだろう。
人形の足の先が、ポケットからちょこっと出ていた。

もしかして、あれは俺の清涼飲料水のフィギュアじゃねぇの？
よっしゃ！　来た来た来た来た来たっ！
俺のところにも、やっと来た。千載一遇のチャンスってやつが。
心の中で、盛大にガッツポーズしたね。
ファンファーレが、パッパカプッパッペーと鳴っている。
俺はズボンを拭きもしないで、手を伸ばすと、森本美愛のポケットからはみ出た足を引っ張り出した。
「これだっ！」
やっぱり、美愛が「交換だ」とか言って俺から接収したフィギュアだった。
お前、元気だったか。お前のために、朝から並んだんだもんな。
ついつい、心の中でフィギュアに向かって話しかけちまうぜ。
同時に、逃げないように森本美愛の手首を掴む。
「俺は、このフィギュアのナンバーを言える」
「え？　ナンバー？」
美愛は首をかしげて、目を大きくする。
思いもよらないって顔だ。
「二七三八だ！」
俺はフィギュアの足の裏を森本美愛にも見えるようにして、確認した。
二七三八。
俺のシリアル・ナンバーだ。今でもしっかり頭に焼き付いているナンバーが、はっきりと書いてあった。
「本当だ……」
おいおい。気づいてなかったんか……。
ここからが本番だ。
「全世界で三千三百三十三個しか作られてなくて、一体一体にシリアル・ナンバーが付いているんだ。何で、お前が持ってる。これは、美愛にあげた奴だ。お前が美愛じゃなければ、俺はどうして持っているのかを、力ずくでも聞かなきゃならねぇ」
やっべー。言いながら、俺の腹が笑っちまいそうだった。玉なんか縮み上がって、引っ込んじまっている。腹いてぇよ。
笑うなよ。
こいつが本気で俺を殺ろうとしたら、俺なんか瞬殺なんだぜ。
俺、今、とんでもねぇ殺人兵器相手に啖呵を切っちまってるんだよな。
タダイマ、さらりと命懸け中、みたいな。
俺、なんて奴、相手にしてるんだ。ったく。
んでも、言わなきゃ、ならんこともある。

俺は、じっと森本美愛の目を見て、言葉を重ねた。
「何で、おまえが持ってる？　俺を倒してからじゃなきゃ、行かせねぇぞ」
森本美愛の顔がまずいという風に歪んだ。腕に力を込めて逃げようとする。
だけど、攻撃する様子は一切ない。
そうか。武力抵抗してまで、逃げる気はないんだな。でも、逃げようとするのか。
そうはさせるか。
俺は半ば強引に物陰に森本美愛を連れていくと、大きく息を吸って、吐いた。
もう、パスポートの写真と一致してなくてもいいもんな。
俺のフィギュア、持っててくれたんだろ。
一歩、踏み込んだっていいよな。
俺は心を決めて、森本美愛の顔に爪を立てる。内心で、「ごめんな」って謝っといた。
一気に、顔に付いている表層のマスクを剥ぎ取っちまう。
ベリベリ。
「はにゃぁ。やられたぁ」
むにむにのシリコンのマスクの下から出てきたのは、やっぱり、見慣れた美愛の顔だった。
ああ、良かった。違ってたら、本気で腹ぁ括らにゃならんところだったぜ。
「よっ」
美愛は「参っちゃったなぁ」という表情ありありで、ちょこんとカマキリ・ポーズの挨拶をしてきた。
よしっ！
「いっ君に見られちゃったね。はにゃぁ。もう、どうしよう。ばれてないと思って、しっかりダークなお仕事しちゃったよぉ」
美愛は顔に残ったシリコンを手でポロポロと剥がしながら、顔をくしゃりと歪めた。
何を、今さら。
匂いで、最初からバレバレだっつうの。
「一つ、言いたいことがある」
どうしても言っておかないといけないことがある。
そのために、今ここにいるんだ。
俺は美愛の顔を、しっかりと俺に向けた。美愛の目が俺の目を捉える。
言う段になったら、突然、俺の心臓がバクバクしてきた。
心臓がたったかと音を立てて、逃げ出しちまいそうだ。
でも、言わねぇと。
「見たけど、お前のことを嫌ってない。だから、消えることも、自分を偽ることもない。……そんだけだ」
「ほええ？」

美愛の目が驚いたように、大きくなる。数秒して、その端をすっと一筋の涙が流れた。
「でも、だって……見たでしょぉ。あれ以上のひどいことだって……」
「だ、だっても、クソもない」
俺は続けた。説得力があるのかないのか、自分でも全然わからなかった。
でも俺は、言葉を重ねる。そのためにいるんだから。
「ないんだ。だから、消えることもないんだ」
「……はにゃぁ。引っ越し、手伝ってね」
それが、ちょっと考えた末の美愛の返事だった。
「わかった」
俺が言い出した手前、拒否のしようがねぇ。
「この住所にあるから。よろしくぅ」
ああ、そうですか。ま、それくらいは、仕方ねぇかな。
と思って、後日、鼻歌交じりにその住所に行ってみたところ、張り紙がしてあって、『荷物全部』俺が手配して運ぶことになっていた。
信じられねぇ！　しかも、部屋の契約は俺の行った日までになってやがるし。
大急ぎで、その日の内に運んでくれる運送屋を探す羽目になった。そんな都合のいいところなんて、あるかっての。
俺、いきなり修羅場モードに突入。
予想外の怒涛の仕事に押しつぶされそうになりながら、俺にとって本当は美愛なんぞ、いなくてもいいんじゃないかとか疑いたくなってきたぜ。
でも、あの時、ぐるぐるしちまったしよ。あーあ。何なんだよ、まったく。どうにかしちまってるんだな、俺。
そんなことは、成田空港に帰ってきたときは露知らず。
「匂いですぐにわかっちまうんだから、俺に対して変装なんて無駄なんだよ」
「なんだ、最初からばればれかぁ。無駄骨だったってのは、ちょっとショックだなぁ。ふにゃぁ」
へっへっへ。体臭を変えないとばれるぜぇ。ま、そんなこと、無理だけどな。
美愛は「今度から気をつけないと」とか呟いている。
いや、気をつけなくていいから。
どんな手で来るかわからねぇし。余計、面倒くさくなるし。
「だ、か、ら、しょっぱなに挨拶したじゃんよ」
「あ〜、あれね〜。挨拶だったんだぁ。ほぉほぉ」
「挨拶じゃねぇんなら、なんだっつうんだよっ！」
美愛が作って決めた挨拶じゃねぇかよっ！　他に、どんな意味があるんだっ！
「いやぁねぇ、ナンパしてるのかなぁっと」

「そんなナンパ、あるわきゃねぇっ！」
そもそも、あの挨拶でナンパが成立するのか？　ありだと思ってんのか？
「いっ君、おばちゃん趣味なんだぁ～って、ずっと思ってたんだぁ」
「全然、違わい！」
美愛って実は、ものすごい勘違い大魔王なのかもしれねぇ。
美愛ん中の俺の像って、どうなっちまってるんだろうな？
一抹どころか、大いに気になるところだ。
「だって、いっ君たら、モロミトスの裸を見て、鼻血どばんどばん噴き出しそうだったじゃん」
美愛は、にっこりと満面の笑みをたたえ、「ふにゃぁ」なんて言ってる。
あ、あ、あ、あ。
来た来た来た来た。お仕置きモード。
ここで、「ふにゃぁ」とかいう笑顔に騙されてはいけない。
「つ～くづく、おばちゃんが好きなんだなぁって」
いや、モロミトスは二十代前半で、まだ、おばちゃんじゃないだろ。
二十歳過ぎたら過ぎたで、また別の魅力が……。
「二十歳過ぎたら、おばちゃんだよぉ。ふにゃぁ」
蛇の舌のように、ちろりと俺を視線で撫でた。
こええぇ。
「あそ」
とりあえず、顔の表情を変えないように細心の注意を払って、美愛に合わせておいた。
「ふーん」
美愛はどこか不満げというか、やり足りなさそうな雰囲気を醸し出していたが、
「ふにゃぁ。まぁ、いっ君も色々あったしねぇ。パフェに桃を追加で、いいことにしようかなぁ」
と、うんうん首を振った。美愛は、「美愛ちゃん、賢い、賢い」なんて小踊り始めてるし。
「桃？」
この時季にか？　今、夏じゃないんスけど。
「岡山の清水白桃っていう桃だよぉ。よろしくぅ」
美愛の奴はケロリと機嫌を直して、満面の笑みを俺に向けてきた。
後で調べて、目玉が飛び出たんだが、天井破りに上等な桃の銘柄をさらりと言ってくれやがっていた。
何度ぐらい聞いたか全然わからない「よろしくぅ」が容赦なく俺の鼓膜にぶっ刺さる。
これって、婉曲的に「許さないわよ」って言ってないか？　言ってないよな？
深読みしたくなるぜ。
まぁじ、どうすっかな。
ま、《天上の光》関連の、このキチガイじみた騒ぎが終わったら、ゆっくり考えるさ。

そういやぁ、後から聞いたんだけど、河本のおっさんと魚石さんが馬鹿みたいに三角帽を被ってドアホな挑発やらかしたのは、撃たれないと思ってやったんだと。

んなアホな。撃たれたところで、絶対に文句、言えねーだろ。

河本のおっさんに言わせりゃ、

「そりゃ、計画が順調で、あと少しで完遂できると思っている人間が、自分の家で銃をぶっぱなして死体を作るなんて面倒なこと、するわけないじゃないか」

だそうで。

ひやひやした俺の立場は、どうなる。一瞬、本気で心配したんだぞ。

「だから、逆にやりたい放題だったのさ。わはははは」

なんか、ひでぇ。

どこがって、言いにくいんだけど、ひでぇ。とにかく、ひでぇ。

もう、それしか出てこねぇ。

第４章　大宇宙のちっぽけな俺たち

1

二〇一Ｘ年五月二〇日午後三時@第二分室

俺たちは東京の霞が関の端っこにある、襤褸っちい建物の分室に戻った。
美愛は美愛に戻ったら戻ったで、やっぱり、うるさかった。
道中は当然のごとく、荷物は全部すっかり持たされるわ、高級桃の百パーセント・ジュースを奢らされるわ、ケーキは買わされるわ、訳わかんない小理屈ばんばん全開だわで、正直、迷惑この上なかった。
森本バージョンの香水のほうが、まだマシだったかも。
どんだけなんだよ、ったく。
俺たちは戻ってくるなり、河本のおっさんの部屋に集合することになった。
俺と美愛、河本のおっさんに魚石さんが、河本のおっさんの机を囲んで座っている。
ちらっと隣の美愛を見たら、頭の中にまだパフェの妄想の名残が残っているのか、微妙にとろんとした目と口元をしていた。
そういう場合かよ。
「さぁて、モロミトスは監禁部屋に放り込んでおいたし。自白剤を投与してもいいけど、とりあえずは、普通の尋問にしておこう。《天上の光》の最後のターゲットは、なんだろうね」
一番でかい獲物。
「宇宙ステーションに決まってる」「宇宙ステーション。はにゃぁ」
俺と美愛の声が、完璧にシンクロした。
な、なんだ。美愛の奴、ちゃんと考えてたのかよ。
とにかく、次の目標は、宇宙ステーションに間違いない。
サッカーコートのでかさだぜ。ついでに、確実に人的被害も出るからな。インパクトが桁違いだ。
「やっぱり、そうだろうね。犯行声明の予告している衝突時刻まで、あと三日しかない」
「まずいですね」
「非常にまずい。こっちは何の手も打ってないしなぁ」
「だめってことはっ！」
俺はガタンと立ち上がって、声を荒げた。
あと三日弱。時間なんか、ほとんどないも同然じゃないか！
河本のおっさんじゃ、だめだ！　悠長すぎる。
叔父さんの命が懸かってるんだぞっ！　他にも五人もいるんだ。
「ダメって言ったら、どうするんだい？」

河本のおっさんの口調は、あくまで、のんびりのほほんとしていた。けど、目は笑ってなかった。
「なっ！」
なんてこと言うんだ。人がいる。何より、叔父さんがいるんだぞっ！
「悔しさと無念さで腹が引きちぎれそうになっても、指を咥えて見てないといけないこともあるんだ」
河本のおっさんの目が食い入るように、俺の目を見る。
おっさんの目を改めてよく見て、俺は驚いた。
目の中には、ただ単なる目の力というだけでなく、何か知った人間が醸し出す凄味すら潜んでいた。ちょっと押したぐらいじゃ、びくともしなさそうな。
「でも、人がっ！　人がいるんですっ！」
「それでもだ」
「生きてるのに……。人でな……」
「だめだよぉ、いっ君。言っちゃだめだよぉ」
俺の糾弾は美愛の超のんびりした声で遮られちまった。しっかり掌をこっちに向けてやがる。暴走中の俺を止めるサイン使いやがって。畜生。
ぐぐぅっ！　でも、叔父さんがっ！
「そういう現実だって、いくらでも存在するんだ。どうしようもないことが」
どうしようもないこと。
俺にだって、確かにあった。
出て行っちまった親父。何もできなかった、小さな頃の俺。
今、目の前にある叔父さんの命。
三つが、ぐるぐると俺の頭の中を回る。
「諦めるんですか？」
「違うよぉ、いっ君。落ち着いて」
「そういうことがあると骨身に染みて知った上で、絶対成功する手を探して、打つんだ。手遅れにならないように。そのために本室があり、分室がある。誰が指なんか咥えていたいと思う？　どんな細い針の穴でも通す。みんな、言わないだけで、腹にしまっているんだ」
じゃぁ、諦めないっていうのか？
「知った上で戦うのと、知らずに戦うのとでは、自ずから必死さが違ってくる。戦い方も変わる」
そうか。そうなのか。そういう奴らの集まりなのか。
周りを見渡すと、みな、無言だった。だけど、どこか一本、しゃんと背骨の通ったような顔をしていた。
どの顔も、晴れ晴れとした顔に見えたのは、気のせいか？
俺と美愛の目が合う。美愛は、えへらぁっと笑った。
「焦っても無駄なことはある。必要な時間は掛かるだけ掛かるんだ。それでも間に合わせて、未然に防

ぐ。いいね」
「はい……」
嫌な未来を変える。そのために存在する組織。……悪くないかもしれないな。

2

河本のおっさんの机の上の電話が鳴った。河本のおっさんは、ワンコールで素早く受話器を取る。
「はい、第二分室、河本――なんだって？　そうか」
河本のおっさんは下唇を噛んで、受話器を置くと、こっちを向いて、
「等々力君、悪い知らせだ」
「何すか？」
「宇宙ステーションで、退避が決定した」
「良かった……」
「良くない。避難用として常駐している、ソユーズは三人乗りだ」
「えええ！　足りねぇ！」
「そうだ。全員は乗れない。さらに悪いことに、一昨日、無人輸送船、プログレスを上げてしまったために、ソユーズをもう一機、新たに迎えにやることはできないそうだ。再度の打ち上げに向けて急ぐつもりらしいが、すぐにはできない。退避する飛行士の名前の中に、君のおじさんの名前はなかった」
「何で！　何でだよっ！」
「アメリカ、ロシアの宇宙飛行士が先だ。叔父さんは、リストでは四番目だった。宇宙ステーションに出している金額が日本よりアメリカ、ロシアのほうが、遙かに多いからね。いざという時に響く」
「なんてこった……」
俺は足元が突然ぐにゃりと歪んだように体のバランスが崩れ、膝が折れてしまった。
冗談じゃねぇよ。せめて、地球に戻ってきてくれてれば……。
叔父さん……。
やばいよ。やばいよ。……いなくなっちまう。
「あ！　アメリカのスペースシャトルは？」
そうだよ。スペースシャトルがあるじゃねぇか。しかも、定員は七人。パイロットを除くと六人が乗れて、ちゃんとみんな、避難できる。
「無理だ。スペースシャトルは、整備に膨大な時間が掛かる。次のフライトは、間に合わない」
俺の一縷の望みは、プチっと呆気なく断たれた。
「いっ君……」
さすがに、美愛の顔も青ざめていた。
「ＨＴＶでも無理かぁ。はにゃぁ」

「ＨＴＶ？　なんだ、それ？」
「日本の補給船。宇宙ステーションに物資を輸送するためのなんだけど、大気圏への再突入ができる構造に、なってないんだよねぇ。与圧室っていう人の入れる空間があるんだけどなぁ。惜しいなぁ。はにゃぁ。しゅーん」
美愛は口を尖らせると、肩を落とした。
「同様に、ヨーロッパのもだめだ。というわけで、退避は無理だ」
なんてこった。手札が全部、アウトってことかよ。
あああああ。
俺は頭を抱えるしかなかった。畜生。余裕ぶっこいたことなんか、考えてられねぇぜ。
はっと気がついた。
叔父さんは今、どう思ってるんだろう。死ねと言われたも同然だと思ってるんじゃないか？　実際、そうだし。
地上からのバックアップを完全に信頼しての宇宙飛行士なはずなのにさ。
裏切られたとか思ってんのかな？　冗談じゃねぇ。
くっそぉ！
ドン！
俺は我知らず、机を殴っていた。いてぇ。けど、構ってられねぇ。
「ドッキングしているソユーズのエンジンで軌道を移動させることはするらしいが、どれほどフェイントの効果があるものか……」
意外なことに、宇宙ステーション自体に推進システムはない。宇宙ステーションは低軌道を回っているために、ほんのわずかだけれど、空気抵抗が存在する。
宇宙ステーションの速度が下がると、高度も下がる。下がりすぎると、大気圏に突入して、燃え尽きちまう。
軌道降下を防ぐために、ドッキングしているソユーズで時たま高度変更するぐらいしか普段は、やっていない。
退避でソユーズがなくなれば、宇宙ステーションなんざ、ただのでっかい的だ。
当ててくださいと言っているようなもんだぜ。
畜生。
「いっ君、まだやれることがあるはずだよぉ。ふにゃぁ」
美愛が俺の肩をポンポンと叩いてきた。
そうだよな。何かあるはずだ。
「絶対に間に合わせようねぇ」
「ああ」
俺は頷いた。

絶対だ。

3

「さて、具体的に、どうする？」
おっさんの一言で、ミーティングは再開した。
「そもそも、どの衛星が宇宙ステーションに突っ込むかすら、我々にはわかってないんですよね」と魚石さん。
「そうだ」
「モロミトスは？　何も言ってないのか？」
「あの女、とんでもねぇ。狙いを喋るどころか、要求ばっかり。それも、女のくせに、下ネタばっかり」
何を考えてんだか。どうせ、やること全然なくて、ねーちゃんでも見て暇でも潰してんだろうな。まるで男みたいだ。
「うーむ。生半可な取り調べなら、躱せるか。……相手する余裕なんて、こっちにゃ全然ないな」
「はにゃぁ。それなら、軌道から割り出せるかもしれません」
「軌道？」
「五月二十三日にアタックできる軌道は限られると思いますが……。その時刻に近くを飛んでいるのなら、数を絞れます」
「それまでに軌道を徐々に変えることはできるだろう」
「早く動けば、アメリカの衛星兵器の的になりますよぉ。宇宙ステーションとの距離が離れてれば、撃てますもん。はにゃぁ」
「なるほど。いくつあるんだ？」
「衛星兵器の死角になる場所で、数十秒以内にぶつかることのできる軌道上にあるのは、二十四個。ふむぅ」
「そりゃ、多すぎる……」
「ふむふむ。だけど、モロミトスが直に触れた衛星は、基本的に《スペース・アトラス社》のものに限るような気がしますけど……」
「なぜだ？」
「打ち上げた後からでも、ハッキングとか、できるんじゃねぇのか？　衝突の命令を後から出せるんだからさ」
「他者からの偽命令を排除するようなプログラムになっているはずだし、通信の全貌が記録されているから、絶対にばれるはずです」と魚石さん。
「最初から衛星のプログラムがいじられてないと、だめか？」
「設計者なら、最後までチェックするから、異常があれば、わかると思うけどぉ……」

無駄なプログラムなんて、積みたくないもんな。それに、軌道に上がって、ウィルスが巣食ってましたなんて、しゃれにもならねぇ。
「軌道上でハッキングを受けた衛星、もしくは《スペース・アトラス社》所有の衛星で、アタック可能な軌道上にあるやつか……」
「でもよ。自分の会社に疑い懸かるようなこと、するかな？」
「被害者面だろうな？　会社の外からのアクセスなら、行けるんじゃないか？」
「それなら、二週間前に《スペース・アトラス社》が絡んだ地上観測衛星が三時間ほど通信不能になったことが、ありました」
魚石さんは持ってきたファイルを、ぱらぱらと捲り、
「ＳＴＡＲ―０１４Ｂです。三時間後に復旧して、通常通りに戻ったそうですが……」
「自社が絡んでいれば、通信のコード表がわかっているから、ハッキング自体はそれほど難しくないな。その軌道は、どこだ？」
「ばっちりアタック可能な軌道の範囲の中にあります」
美愛は二十四個の衛星リストを見せた。
「決まりだ。そもそも《スペース・アトラス社》の衛星は、この軌道上に二個しかない。現時点を持ってＳＴＡＲ―０１４Ｂをアルファと呼称する。もう一つをベータだ」
「質量が八百キログラムですか……」
「でかいな……」
「ミサイルで落とすとか？」
「ふにゃら。そもそも、破壊するの？」
「え？」
「アタック可能な軌道面での破壊は結局、できた破片の衝突が気になると思うけどぉ。あまり大きいと、宇宙ステーションのバンパーで防ぎきれないしぃ。ふにゃぁ」
バンパーってのは、小さいデブリぐらいなら当たっても宇宙ステーションが破壊しないように、宇宙ステーションを覆っている一枚のアルミの板なんだ。
この板にデブリが当たると、デブリはバンパーもろとも、高エネルギーの原子になっちまう。
この状態になればステーションに当たる質量が極端に小さいから、ぶつかっても、その奥のステーション本体は壊れないっていう寸法だ。ま、ちっとは凹むけどな。
でも、防げるのって、せいぜいパチンコ玉ぐらいの大きさまでなんだよな。
それよりでかい破片なんて、ざらにできるぜ。
すっげーやべぇって言わね？
「機能の終わった衛星をぶつけるってわけにもいかないか……」
「宇宙ステーションの近所で、安全に衛星を破壊できないと思ったから、退避にしたんだろう」
壊せなきゃ、それも、宇宙ステーションが安全な状態で壊せなきゃ、意味がない。

どうしたらいいんだ……。
何かないかな？　思いつかなきゃ、叔父さんの命はない。
おもむろに、俺はポケットに手を入れた。
ん？
ポケットから出てきたのは、叔父さんに衛星回線で話した時に自慢した、トルバス灯台の模型だった。
叔父さんと「行こう」って約束してたんだよな。果たせないのかな？
しかも、まだ、ネットを探し回り、オークションでやっとこさっとこ手に入れた、この模型だって見せてない。
叔父さんとやりたいこと、いっぱいあるのにさ。
しげしげと眺めているうちに、頭の中がぐにぐにと動き始めた。
四つの塔で一つの灯台。四つ合わせて一つの目的……。
……てことは、でかいやつ一発でけりをつけないで、いくつかに分ければいいんじゃねぇの？
「ああっ！」
そうかっ！
俺の大声に、皆が振り向く。
「……美愛の作った衛星を沢山ぶち当てれば、軌道が変わるんじゃねぇ？」
「あ、そうかっ！」
「衛星同士が衝突したときに、どんな風に壊れるかが、わからねぇんだろ？　そもそも、当てるのが小さければいいんじゃね？」
「確かに」
衛星を衝突させたとき、大きな破壊をしちゃならないわけで。
ターゲットがでっかくぶっ壊れるのも困るけど、こっちの防御衛星も壊れたときにでかい破片になっちまっちゃ、なお困る。宇宙ステーションにぶつかるデブリを増やすことになっちまうからな。元も子もねぇ。
だけど、そもそも、最初から小さければ、破片ができたとしても、たかが知れてるってわけだ。
困ったことは、質量が小さいから、アルファに当てても、あんまり軌道が変わってくれねぇ。
だけど、そこは数で勝負だ。リスクの小さいのを沢山ばしばし当てれば、結果的に思った軌道になるだろうよ。ぶっ壊さないで、宇宙ステーション衝突は免れるわけ。完璧じゃん。
トルバス灯台ありがとぉ！　趣味は持ってるもんだっ！
千五百年前のアイディアがここで使われるなんて、東ローマ帝国の人たちも夢にも思うめぇ。土の中で驚いてるだろうな、こりゃ。
「ふにゃぁ。でもね、いっ君。ちょっと大きいんだよねぇ。空き缶の大きさでも、相手の衛星は大破。どんなふうに壊れて、破片がどんな大きさになっちゃうか、わからないんだよねぇ。一センチぐらいまでなんだよぉ。惜しいなぁ」

ぐぅ。だめか……。
「目標の衛星に刺さるのがベストだな」
「で、軌道を逸らせる」
「ふにゃぁ。でも、壊れないという保証がないですよぉ」
「一枚板で外装を作って、ロケットの形を先の長い円錐にするしかないだろう」
「それなら、破壊するために衛星を当てるわけではないから、国連の決議にも反しないですし」
「決まりだ。当てるのも至難の業だが、当てよう」
「ふにゅぁ。アメリカの攻撃衛星の攻撃可能領域と宇宙ステーション攻撃可能な範囲から、予想軌道を出しますぅ」
美愛はノートに一しきり鉛筆を走らせると、ノートパソコンに軌道予想パラメータを打ちこみ始めた。
美愛の部屋（今はどこにあるのか知らないが）には、二メートル程の高さのサーバーが置いてある。かなりの高速で、独自のＯＳが走っている。こいつにネットワークを介してアクセスして、計算させているんだろう。
「どうやって軌道に乗せるか、です」
「もう決めてある。ＨⅡ―Ａロケットだ」
「ああ。そういえば、ロケット打ち上げの信頼性を証明するために、連続して上げるんでしたね」
日本の国産機であるＨⅡ―Ａロケットは五年前に打ち上げ失敗が続いて、国際的な信頼性が失われちまっていた。挽回するためには、ロケット打ち上げの連続成功を成し遂げる必要がある。
さらに、技術力のアピールのために、短期間での連続打ち上げを企画していたんだ。
「相乗りですか？」
俺たちの衛星の打ち上げた方法だ。
そりゃそうだ。重量一キログラムの衛星のためにロケットを打ち上げるなんてことは、絶対ないからな。ちっこい衛星の性ってやつ。
「いや、相乗りにはしない。相乗りでは、うちの欲しい軌道面に乗せられないからな。乗っ取るぞ」
乗っ取るだって？
すっげぇ。なんて贅沢な打ち上げだ。普段なら決して、こんなことはしない。叔父さんたちの命と宇宙ステーションを守るためなんだ。
不覚にも、潤みそうになった目を隠そうと、俺は下を向いた。
普通は数トンのでっかい人工衛星を打ち上げるためのロケット使って、何十キログラムかの衛星を運んでもらうんだ。
ロケットって燃料比が桁外れで、九十パーセント以上になる。百八十トンが燃料だ。
ちなみに、ロケットの打ち上げって、一回で百億円も掛かるんだぜ。
でも、どんなに贅沢でも、欲しい軌道に乗せてもらうためには、ＨⅡ―Ａロケットで上げてもらわなきゃ、だめなんだ。

4

それからの俺たちは、てんやわんやだった。
美愛の計算によると、十二個のちっこい衛星が必要なんだそうで。
大急ぎで作る羽目になっちまった。発射のほうは明後日の夕方。
宇宙ステーションが種子島上空を通るのを狙って打ち上げる。一日一回しかチャンスはない。
上げる日は一日しかないんだ。つまり、一生一度のワンチャンス。逃したら、叔父さんの命はない。
雷とか、鳴らんことを祈るぜ。てるてる坊主どころか、晴れ請いの術者の団体さんを集めておきたい気分だ。
当然、俺も駆り出されるわけで。半田付けなら任せとけっ！
と思ったんだけど、外注に出すわけにはいかねぇ。
え？　俺が全部、くっつけるのかよ。一機につき三百以上の部品と回路基板との接点があるんだぜ。
んな、ご無体な。
「美愛ぁ、やってくれよぉ」
当然、手伝ってくれるかと思って、泣きごとを言ってみた。
「ふにゃぁ、もう、いっ君のほうが、上手で速いよぉ」
美愛は、にこにこ笑いながら、手を振って行っちまった。
だから、なんで、全部が全部、俺なんだよっ！
おっさんに聞くと、美愛は衛星の頭の部分（真っ先に突っ込んでいく部分だ）の設計、テストするんだそうな。初めから言えってんだよ。
てな訳で、俺は秋葉原への買い出しやら、合計二万か所以上にも上る半田付けやらで、店屋椀屋（てんやわんや）になった。全部つけ終わるまで、ぶっ通しでやって、それでも十六時間。
チェックは分室の技術担当の人がやってくれた。
担当と言っても、まぁ、みんな、何でも屋だったりするんだけどな。
怒涛の半田付けが終わったと思ったら、規定による八時間の睡眠の後、組立てが待っている。
作戦中は、八時間は寝るって決まってるんだ。寝不足だと、失敗する確率が高くなる。
ロケットの推進部分は部品だけ、ありえねぇようなタイトなスケジュールで無理を言って、日本の誇る墨田区の町工場に頼んだ。おっちゃんたち、すまねぇ。
なんとかかんとか、三十二個のロケット付き衛星を組み立てて厳重に荷造りをすると、ジェット飛行機とヘリコプターで種子島まで運んでもらった。東京から一時間半で着いちまった。
もう二度と種子島なんて来ることはないと思ってたぜ。
もう一回、あの轟音を聞くとは。発射は一応、かっこいいんだけどな。
と思っていたら、

「帰るぞ」
だってさ。もうかよ。
俺たちはロケットのフェアリングに取り付けるところまでチェックすると、すぐに東京に戻ることになっちまった。魚石さんだけ、監視役で種子島に残るんだそうで。
打ち上げ、見ないのかよ。なんでだ？
「それはねぇ、いっ君。東京のほうが監視・制御システムが充実しているからだよぉ」
そんなものか。
「だって、HⅡ―Aロケットは種子島のほうが管制できるけど、衛星は、こっちのほうの管制だからねぇ」
なるほど。
「はいはい、とっとと帰った。帰った」
という訳で、俺たちは来た道を、振り子のように綺麗に逆になぞって、東京に帰ってきた。

5

二〇一X年五月二二日午後一四時一三分@第二分室

「さあて、そろそろ打ち上げだ」
俺たちはJAXAから直に送ってもらっているライブカメラの映像を覗いていた。
魚石さんの報告では、現地は晴れ。
今回は特別な事情があるから、ちょっとの不都合な天気ぐらいなら上げる予定だったらしいけど、綺麗さっぱりと晴れている。
たいていの打ち上げでは宣伝を兼ねて、インターネットでの中継を大々的に公開するんだけども、今回はなし。打ち上げる荷物が、ちょっと他人様には言えないもんだからな。
乗っ取りましたなんて、言えるか？　だから、一般には衛星のチェックを重ねるという偽情報を流して、打ち上げをごまかしている。
「メイン・エンジン、点火」
モニターの中のHⅡ―Aロケット中央のメイン・エンジンから、水蒸気の白い煙が上がってくる。
来た来た来た。
でも、まだ、安心はできない。
実は裏では最後の最終チェックがまだ行われている。何か一つでも不具合があれば、液体ロケットであるメイン・エンジンはカットして燃焼を止めることができるからだ。
反対に、左右に付いている補助の固体ロケットは、一度でも点火すると、もうそれっきり止められない。うっかり変な方向にでも行ったら、大惨事だ。

「五、四、三、二、一、リフトオフ」
周りの固体ロケットに火が着いて、ごーっという音を立てながら、ロケット全体がゆっくりと上昇していった。
よし。まずは打ち上がったぞ。
HⅡ―Aロケットは、進行方向をだんだんと上から東に向きを変えて、周回軌道に沿う。
十四分後には、地上四百五十キロで俺たちの衛星がポコポコと切り離されるはずだ。
宇宙ステーションの軌道は、だいたい地上三百五十キロ。
アタックする高度は宇宙ステーションに破片が飛んだ時の宇宙ステーション内での避難の時間を考えて、四百二十キロから四百十キロになった。
これだと、こっちのアタックで破片ができてから、破片の宇宙ステーション到達まで、最短で五秒ちょっと。
穴が空いてから空気が抜けきるまでに八秒あるから、最低でも十三秒の余裕があるってことだ。
叔父さんたちがなんとか隣のモジュールに移動できるだけの時間は、稼げている。
できるだけ離れてるほうが、いいには決まっている。だが、これより距離が離れると、守る空間が広くなりすぎて、防御不能。
計算上、こっちは四つ当てると、敵さんを押し出すことができて成功する。
四つ当てればいいんだ。四つごとの組だから、全部で三組ある。三回チャンスがあるんだ。これ以上は、軌道との関係で無理だった。
地上から管制するのかって？
そんな細かい制御、できるわきゃねぇだろ。
そもそも、そんな小さなもんが地上から見えるわきゃない。だから、眠り爆弾みたいなのが、こっそり打ち上がっていたんだから。
宇宙ステーションの外に取り付けてあるカメラを使うのさ。午前零時には西アジア上空に宇宙ステーションはいる。日の出ちょっと前ぐらいだ。
薄明かりの中で、うまく他の衛星が太陽の光を反射してくれて、光点が見えるはずなんだ。
その画像のデータが、そのまま美愛のサーバーにインプットされる。で、宇宙ステーションとの相対座標と相対運動を割り出すってわけ。
それに合わせて美愛設計の固体ロケットに火がついて、敵さんの衛星に向かって突っ込んで行く予定なんだ。
何と言っても、固体ロケットだから、一回しか点火できねぇ。でもって、燃料が尽きるまで十秒間ずっと加速し続けちまう。点火したら一発勝負なんだよな。
なんで、もうちょっと小器用なもんにしなかったかって？
しょうがないだろ。全部の大きさを空き缶サイズって決めてたんだからさ。
小さくしただけで、十分に大変だったんだよ。液体ロケットだと、エンジンを切ったり再点火できる

けど、そもそもエンジンが複雑すぎるし、断熱できなくなっちまう。
ジンバル式ってのを入れて、噴く方向を変えられるだけ立派なんだ。
とにかく、一発勝負だ。
おっさんによると、俺たちの衛星は、うまく狙った軌道に乗ったらしい。
ふぅ。何とか、対抗手段を軌道上に上げることができた。
アメリカさんは、とりあえずは、静観する方針に決めたようで、何も言ってきてないらしい。
高度が違うと、地球を一周する時間が違ってきてしまう。
犯行予定時刻の世界標準時の午前零時ごろに、ちょうどいい位置に来るように設定してある。
日本時間では、五月二十四日の午前九時だ。あと、十八時間。

6

五月二十三日、午後七時。
「そろそろ、ソユーズが出るころだな」
へぇ。そうか。
俺は、きゅっと左の奥歯を噛みしめた。
これで完全に、宇宙ステーション自身が動くことはできなくなった。叔父さんたちは、取り残されたまま。
でも俺は、自分で思ったより、冷静に報告を受けとめられている。
俺たちが叔父さんたちを守るんだ。ソユーズなんて、全然、当てにしてねぇ。俺たちは守る手段があるんだ。
可能性はゼロじゃねぇんだから、気落ちしている暇なんか一切ねぇ。
俺たちは宇宙ステーションのカメラから送られてくる映像を処理して、衛星の軌道を変えるプログラムの洗練化を進めていた。
一秒で七キロ進む世界だ。計算速度は速ければ速いほうがいい。掛ける三をしたほうが速いのか、同じ数を二回足したほうが速いのか。コンマ〇〇一秒でも速ければ、そっちを採用だ。
地震速報で培った技術が、日本にはある。俺たちはマニュアルに従って、計算の一つ一つを洗い出していった。
しっかしなぁ、何だよ、この計算式。足したり引いたり掛けたり割ったりしているのはわかるんだが、結局のところ、式全体で何を表しているのか、全く掴めない。
「はにゃぁ。人工衛星をきちんと飛ばすためには、特殊相対論が必要なんだよねぇ。スピードが速すぎてねぇ。いっ君にとって、さっぱりでも、しょうがないよぉ」
美愛は顔を上げると、片眉をちょいと撥ね上げて、肩を竦めた。
はぁ、そうですか。

って、トクシュ・ソウタイロン？　アインシュタインの、あれか？
美愛お前、どこで覚えたんだ、そんな小理屈。
「ん～、だって、もう、向こうの大学を出ちゃったんだよねぇ。地獄のように忙しい三年間だったんだよぉ。詰め込み勉強しすぎて、ブロイラーの鶏になったかと思うことも、よくあったなぁ……」
かっ……。
俺の喉は、変な音を立てて固まっちまった。
そんなことしてたのか。
物理学やらロケット工学やら殺人技術（美愛本人の殺人現場を実際には見てないけど、多分そうだろう）まで。どんだけやったんだよ。
俺がぐれて遊び呆けちまっている間に。
「いつ日本の地を踏めることかと思ったよぉ」
目の前にいる美愛は、そんな努力を積み重ねてきたとは一見して見えないぐらいに、のんびりしている。
いつもの、ふにゃふにゃした顔の表情も、そのまんまだ。どこからどう眺めても、人と違うことができるようには見えない。
きりっとすれば、もっとしっかりした人に見えるのにな。
「おまえ、もっと偉そうにしてもいいんじゃないのか？」
「はにゃ？　何で？」
美愛は、まるで俺が宇宙人の言葉を喋ったかのように、奇妙な顔をした。
「だって、いろいろ、できるじゃん」
「そうかなぁ。ふにゃぁ。うーん」
美愛は、ちょっと首を傾げて考えると、
「でも、できるって言っても、まだまだ、できないこととか知らないことは、もっともっと一杯あるよぉ？」
そういう問題か？　てか、そういう風に考えられる奴って、どんだけいるんだろう？　一つできただけでも、自分の天下みたいな顔する奴らばっかりだってのに。
「だからねぇ、いつもゼロ地点に立ってる、って思うようにしてるんだよねぇ。いつでもそこが始まり。優越感に溺れるのは甘美なことだけど、大事なこと見えなくなっても、嫌だしなぁ。ふにゃぁ」
「……そうか」
ふ、深い。
そこまで考えて、そういう風に行動してるなら、言うこと全然ねぇな。
「でも、やっぱり、性格かもねぇ。きびきびするのは、疲れるよぉ」
あ？　もしかして、立派そうなこと沢山あれこれ言ってたけど、本音は、それか？　疲れるってか？
ちょっと尊敬しかけて、損した気分だ。

まぁ、なんでもいいか。
「やりたくないなら、しなくていいよ」
「ふにゃ」
美愛は満足げに目を細めると、モニター画面に戻った。
そうそう、時間を食う部分を潰していかないとな。

7

五月二十三日午前八時。
「等々力君、ちょっと来たまえ」
俺たちが最後の点検を進めていると、河本のおっさんに呼ばれた。
あ？　なんすか？　今、手ぇ離せねぇんだけどなぁ。
おっさんの部屋に行くと、パソコンの前に座らされた。
「叔父さん！」
目の前のモニターに映っていたのは、叔父さんだった。
「叔父さん、叔父さん！」
俺の口からは、それしか出て来ない。
叔父さんの顔は、どこか窶れて、疲れの影が出ていた。
叔父さん、生きてるよ。動いてるよ。
俺は思わず叔父さんの顔をよく見て、死相が出てないかどうか、確認していた。
だ、大丈夫そうに見えるよな。大丈夫だよな。
そんなあやふやなところにまで、縋ってしまう俺がいた。
「よぉ、一起〜。お前、何かやってくれてるんだって？」
叔父さんは、ちょっとおどけたように、にやりと笑った。
おおぅ。俺は仰け反って、椅子から転げ落ちそうになった。
これが、一時間後に死ぬ人間の顔か？
俺ばっかり悲壮な顔してられねぇじゃんかよ。
「まぁね。うまくいくか、全然わかんねぇけど」
俺は、正直に話した。嘘ついて安心とか、絶対させられねぇ。
「そうか」
わかっているように、叔父さんは頷く。
俺にプレッシャーを与えないようにだろう。「しっかりしてくれ」とか、そういう余計な言葉は言わなかった。
叔父さんには、俺が誘拐されたこととかは、知らされていないらしかった。

知ってりゃ、何か言うはずだし。
「お前の顔が見られて、良かった。お前がこんなことに加担するようになるとはな。知らないうちに、変わったもんだな」
「いや、それほどでもないよ」
これは謙遜じゃなくて、本音だ。
俺には大きな一歩だけど、とっくに前を走ってる奴がいるんだから。
「何かあれば、ズヴェズダに避難する。元々、生活できるモジュールだし、頑丈だから、ちょっとぐらいなら、宇宙を漂っていられるさ」
ズヴェズダってのは一番最初に打ち上げられた宇宙ステーションの居住棟だ。ロシア製で、結構こいつが頑丈に作られている。太陽の活動が激しくて、放射線がすごいときとかに一時的に避難したりする場所なんだ。
そりゃそうだけど、地球に落ちる可能性のほうが高いって言うじゃないか。それに叔父さんのいるところに、でかい衛星が当たったりしたら！　他のモジュールに避難する時間も一切なかったら！
心配な問題点は、山ほどある。数え上げたら、際限がない。
でも、無駄に心配させるようなことを言ったって、いいことなんか、何一つありゃしない。
「叔父さん、俺、点検がまだあるから」
この通信の終わりを今生の別れみたいに湿ったものにしたくなくて、俺は自分から話を切り上げることにした。
本当は、通信を切りたくなかった。ずっと自分の目で、叔父さんの無事を見届けたかった。けど、俺には、やることがある。
次の通信は、生き残ってからだ。

8

五月二十三日午前八時四十五分
俺たちは十七インチのモニターを縦に三つ、横に三つ並べた大きさのモニターの壁の前にいた。
宇宙ステーションの上方を写す広角のカメラの映像やら、望遠鏡に繋がったカメラの映像やらの映ったモニターと、俺たちのコントロール用のモニターが並んでおいてある。
おっさんの部屋の隣の部屋（ここも、おっさんのなんだけど）に急遽、取り付けたものだ。
左側には縦三横三のモニターの列。こいつらには、宇宙ステーションの周囲に取り付けてあるカメラからの映像が映っている。
叔父さんたちのいるズヴェズダの内部の映像も、本当は見られるんだけど、俺たちの後方、部屋の端に置かれたモニターにだけ映る。おっさんの目にだけ入るような位置取りになっているんだ。俺たちの気を散らせないためにさ。

叔父さんの姿が目に入っちまったら、どうしたって気になって、頭と手元が疎かになっちまうだろ？
あと十五分。
チェックもひと段落ついて、今頃になって、本当に俺たちの目の付けた衛星が宇宙ステーションに向けて降ってくるんだろうか、という考えが、ふっと頭をよぎった。
確かに、通信衛星が落ちた。
犯行声明が出されて、俺は誘拐されちまって、アメリカまで行って、モロミトスとやりあって、小さな衛星どもを落っことして、ここにいる。
ソユーズは宇宙ステーションから出て行っちまって、叔父さんたちは取り残されて。
ＮＡＳＡが「テロが起こる」と判断した結果だ。
でも、宇宙って、何がどうなってるか、全然わかってなんかいやしない。
宇宙論がどうのとかじゃなくて、衛星軌道のどこに何があるのかすら、本当にはわかってないんだ。
人間の作った結果だってのに。
俺の目の前にあるデータは、どれもこれも本物っぽい。だけど、この数字は全部、でっち上げて作る偽装だって可能なわけで。
いままで無我夢中で走ってたから、気がつかなかっただけじゃないかな？
実は、これが「ドッキリ」だったら――なんて、つい考えちまいそうな俺がいた。
それなら、十五分後に叔父さんは消えてなくなることはない。
……俺、逃げたいのかな？
いや、違う。じゃ、なんで、こんな自分にブレーキ掛けるようなこと考えちまってるんだろう？
「な、これ、本当だよな？」
俺は急に担がれてるんじゃないかと不安になって、隣にいる美愛に顔を向けた。
なっ！
なんと、美愛の奴、寝てやがった。ミッションのスタートは十分以上後だけども、なぜ寝られる？
口の端から涎が垂れている。起きててもふやけた顔なのに、どうしようもないくらいに緩んでいて、担がれてるんじゃないか、って思いが強くなっちまうじゃねぇか。
鼻提灯じゃないだけ、まだマシってか？
き、貴様～！
頭の中で軍規なんてものがちらついたのは、気のせいじゃない。
俺は、むにーっと美愛のほっぺを引っぱって起こすと、寝起きだろうとなんだろうと容赦なく、俺の疑問をぶつけてやった。
「ふにゃり、ふにゃり。人生みな夢ってね～」
「そういう哲学的なことを聞いたんじゃねぇ」
「うん。いっ君の直面していることは、み～んな、本当だよ～。大丈夫ぅ」
美愛の奴、よしよしと俺の頭を撫でやがった。

んがぁ！　なんで、そうなるんだっ！　珍しく頭良さげなこと言ったはずだったのに。
「確かに、百パーセント本当かはわからないよぉ。確かな筋から得た情報でもね。だけどね、本当になってから、後悔したい？」
「いや」
そんなん、まっぴらだ。
美愛はしばらく「ん～」と俺を見透かすような目をして、首を傾げていたが、
「むにゃ～。何か、いっ君らしくないなぁ。いっ君、あっち向いて」
いきなり俺の後頭部を両手で掴むと、俺の頭をぐるりと回した。
な、なにしやがるんだ。
頭か動かせなかったら、美愛が何するつもりなのか、てんで見えねぇじゃねぇか。
「おいおい」
俺は身じろぎして、美愛の腕を剥ぎ取ろうとした。
「だめだよぉ、ちゃんとそっち見てないと」
美愛の声が耳元で、思ったより近くに聞こえる。
心臓がバクンといった。
「な、何だよっ！」
「ふにゃふにゃ。いいの、いいの」
美愛の声、なんだかしっとりしてないか？　俺の思い込みか？
何が起るんだ？
俺は、どうにもこうにも知りたくて、視線をあっち行き、こっち行きさせる。
あ、視界の端っこにだけど、モニターに反射して美愛が見えるじゃないか。
だけど、そこに映ったものは、さらに俺に追い打ちをかけて、切羽詰まらせることになる。
なんとなんとなんと。美愛の顔が俺の顔のすぐ横まで来ていた。その距離、二センチと離れてねぇ。
ち、ちけぇよ。
ふぅ、ふぅ、ふぅ。
思わず荒くなる息を懸命に押さえようとした。俺の両手は俺の腿をぎゅっと握り、ごくりと唾が喉を通る。
「お、おまっ！」
そうこうしているうちに、美愛の頤が、くいっと上を向いて……。
来たっ！　もしや、あれをするんじゃ……。俺のほっぺたに「ち」で始まるものをするんじゃねぇのか？
俺は一本釣りされる鰹のように、視界の端のモニターから目を離すことができない。
ドキドキドキドキ。
いやがおうにも高鳴る鼓動で、頭がいっぱいになっちまう。

が、次の瞬間、俺の青少年的な淡い期待は、砕け散り、俺は人ならざる言葉で叫んでいた。
「もんぎゃぁ〜！」
美愛の奴、首を二十度ぐらい傾けたかと思うと、俺の耳たぶに歯を立てて、食らいつきやがったんだ。
そりゃもう、勢いよく、ガプッと。「ち」を見るくらいに。
いてぇ、いてぇよ。すんげぇ、いてぇ。
耳がちぎれちまうんじゃねぇかと思ったね。
さすがに俺の目から、ぽとりと滴がこぼちまったじゃねぇか。
俺の期待を返しやがれっ！
「何しやがんだ！」
ワンテンポ遅れて叫んだ。だが、美愛の奴め、顔じゅうが口になったんじゃないかという笑顔を浮かべて、
「いっ君、その調子、その調子」
なんて、Ｖサインをしやがったんだ。
どう見ても美愛の表情は勝ち誇っているようにしか見えない。
ひっでぇ。
どうして、俺の周りは、こいつを筆頭にして、やたらひでぇことしかしない奴ばっかりなんだ。
「いっ君、緊張が取れたでしょ？　ふにゃぁ。大成功」
あ？　緊張？
そういや、さっきの変で病的な心配事は、俺の心からは消えてなくなったな。
今、俺の中では「やることやるだけだ」って気持ちで溢れている。
緊張のせいだったのか。
にしても、他にも、やりようってもんが……。
ぜーってぇ、後で仕返ししてやる。
「むごほっごほっ。……若いねぇ」
おっさんの咽せたような咳払いと、呆れきった呟きが、背後で聞こえてきた。
み、見てたのか……。
「ここは、保育園じゃないんだがねぇ」
「きゃっはははははは」
ぐっ！　俺は、そんなに若かねぇよ！

9

五月二十三日、午前八時五十七分――。
「アルファの現在地から、第一次予想進路を出します」

モニターの一つの宇宙ステーションの上から見た図に、大きな円が描き出された。
隣のモニターには宇宙ステーションを原点に取った三次元座標が映し出され、アルファの予想軌道が範囲で示されている。宇宙ステーションの斜め上方にある十二個の光点が、俺たちのロケットだ。
俺たちは予想進路を、大きく分けて三つ計算していた。宇宙ステーションの左側三分の一、中央三分の一、右側三分の一をそれぞれ狙ってきた場合に備えて、噴射のタイミングと角度を入力して、待っていた。
いよいよだ。
アルファの発する光点が、宇宙ステーションの広角のカメラの画像の中に飛び込んできた。
予測した場所から画像の中に入って来ている。
まだ、ドット一個分ぐらいの大きさしかないけれど、ちゃんと異常のない軌道上にいる証拠だ。
この画像の中の光点の動きから、アルファの運動を求めて、俺たちのロケットの軌道を決めるんだ。
早速、日本の実験モジュール、きぼうの外につけられた直径一メートルの望遠鏡がアルファの姿を追いかける。広角カメラの画像から位置、運動の方向を割り出して、追尾するシステムになっているんだ。
右側のモニターの中央にアルファの姿が映った。
細かいところまでは、わからない。けれど、なんとなく本体と太陽電池の違いがわかるくらいには、形はわかる。
こいつか。
つべこべ言わず、とっとと地球に落としてやりてぇ。

１０

五月二十三日、午前八時五十八分三十七秒。犯行予告時刻まで、一分二十三秒。
突然、ビープ音が鳴った。
「アルファの軌道が変更されました。ふにゃ」
「やっぱり、ギリギリで変更してきたか」
光点の位置が、予定の場所からずれてきたらしい。
一瞬、望遠鏡の視界から外れた。が、またすぐに捉えられる。
「宇宙ステーションの全面積をアタックできるギリギリのタイミングです。はいぃ」
「しかし、これで宇宙ステーションへの攻撃が確実になった」
マジで来るってか。
「第三次予想進路、出します」
さっきよりも遙かに細い、アルファの軌道予測範囲が示される。それでも半径五十キロが三十キロになっただけだ。
こいつを、どうにか当てないとならねぇ。

11

五月二十三日、八時五十九分二十五秒。犯行予告時刻まで、あと三十五秒。
「アルファの最終予想進路を出します。全てのロケットの安全装置を外します」
「ほいほい」
俺は「点火」コマンドを受け入れるように、キーボードを叩いて、命令を送った。
万々が一のことがある。何重かの安全ロックが掛けてあるんだ。
たとえば、もしもよ、準備中にモロミトスが現われでもして、いきなりポチっと「ファイア」なんて押されても、困っちまう。
というか、困るどころか、最悪だ。
「二十秒前。点火」
俺たちは、これぞという予想進路を、先に入れてある。
「行け」
俺は、エンターキーをパシンと叩く。
コマンドを入れて、一秒とコンマ三五で、俺たちのロケットに点火されたはずだ。
当たってくれよ。
ロケット・エンジンを吹かす、つまり、加速するってことだ。加速すると、軌道の高度は上がる。物理の法則上、そうなっている。
俺たちの選んだ軌道は、上から降下してくるアルファを下から迎え撃つコース設定だった。
「行け」という命令を出しちまった以上、もう止められない。
「五、四、三、二、一、第一弾、衝突します」
美愛の声が、しんとした、けれど熱気のこもった部屋に響く。
俺たちは望遠鏡からの映像を、目を皿のようにして見つめていた。
……ん？　おいおいおい。
アルファが消えたっ！
アルファのすっと消えた視界を、俺たちの衛星たちだろう、なんとなく小さいものが列になって、画面をひゅっと横切って行った。
だけど、それだけだった。
当たったのか？　肝心のアルファが見えなかったから、当たったかどうか、全然わからない。
俺たちは見るものを変えた。
宇宙ステーションからの広角のカメラからの映像を、じぃっと見つめる。望遠鏡の画像より遙かに広い範囲が見える。
もしも、ぶつかっていたら、撥ね跳んだ破片が光を反射して、光の点が大きくなるはずだ。

だけど、見えるはずの光の煌めきが見えない。
てことは、外した？
望遠鏡のカメラが、もう一度アルファを捉え直す。
アルファの姿からは、俺たちの衛星が刺さったか、アルファが壊れたか、依然、わからない。
「第二弾、衝突します」
第一弾の衝突予定時刻の二秒後、やっぱりアルファの姿は望遠鏡の視界からひょいと外れて、最初と同じ光景が繰り返された。
「当たってねぇのかよっ！」
「こっちの予想進路に大体あってるはずなんだけど、避けてるのかも、ふにゃ」
「そ、そんな」
「自動で避けるなんて」
さらに二秒後、第三弾のアタックが行われた。
だが、結局、ひょーいと避けられてしまって、当たることはなかった。
当たらなかったということは……。十数秒後に来る惨劇が現実のものとなるってことだ。
「なんでだよっ！」
「アルファの軌道は？」
おっさんのちょいと焦った声が、事態の深刻さを物語っていた。
「どうなってんだよ！」
美愛のマシンの再計算の結果が出るまでが、ものすご〜く長く感じられる。せいぜい、コンマ一秒か二秒だってのに。
「アルファの宇宙ステーションへの衝突確率は、十五パーセント」
美愛の声が調子っぱずれで、上ずっている。
美愛の答は俺たちの予想を大きく外れ、いい意味で裏切る結果になった。
氷点下まで凍りついていた空気は、衝撃と安堵が入り混じり、大きく動く。
「本当に？」
「我々の第三弾を避けた時点で、宇宙ステーションへの衝突コースから外れました」
「おおお。でも、当たるんだろ？」
「アルファが姿勢制御用のスラスターを最大で噴かしてコース修正した場合には、ありえます」
「つまり、ぶつけて機能不能に陥らせられれば、良かったのか。なまじっか生きてやがるからなぁ」
「畜生」
「どこに当たる？」
「左側の太陽パネルの左三分の一を中心とした、半径十メートルの範囲内です」
「おお」
とりあえず、叔父さんたちのいるズヴェズダは大丈夫だな。

「まだ、安心できん。衝突の衝撃で、バランスが崩れる可能性もある」
「アルファの宇宙ステーションへの衝突まで、五、四、三、二、一、衝突」

12

宇宙ステーションの上側を向いているカメラでも細部が分かるほどに大きくなったかと思うと、サイド方向、美愛の予想した方向を映しているカメラに映った。太陽電池パネルの破片を飛び散らせる。
当たった！　当たっちまったい！
叔父さんは？
ズヴェズダへの直撃は避けられたものの、衝撃で宇宙ステーションのコースがずれるかもしれない。そうでなくても、今の衝突でズヴェズダが変に揺さぶられたかもしれない。
ちょっと想像してみろよ、自分の乗ってる乗り物が縦横上下に揺さぶられるんだぜ。
たまんねぇよ。
俺は猛ダッシュでズヴェズダを映しているモニターの前に行って、叔父さんを確認しようとした。
「叔父さん！」
いたっ！
叔父さんたちは、いつもと同じだった。ただ、顔じゅうから喜びが溢れていた。
「一起！　助かったか。ありがとな」
「うん。でも、太陽電池パネルが少し吹っ飛んだ」
俺たちのロケットは当たらなかった。けど、牽制にはなったらしい。中心部分から押し出すことができたんだ。よしと見なして、いいと思う。
他の宇宙飛行士も叔父さんとの会話に顔を突っ込んで邪魔した揚句に、「ありがとう」と言った。
「発電量の低下は、こちらでも確認した。もう対処済みだ。とにかく、生き残れて良かったよ」
「帰ってきたら、トルバス灯台に行こうよ」
「ああ。そうだな、行こう。さぁて、お茶にでもしたいな。ああ、でも、生き残ったから、これから仕事が山積みなんだ」
叔父さんはん～っと伸びをした。緊張が抜け切ったのかな？
「ははは」
なんて、和気藹々としていたら、突然、またビープ音が鳴った。

13

「なんだ！」
「ベータ接近中。はにゃぁっ！　こりゃこりゃ、ズヴェズダへの直撃コースだぁ！」

ベータ？　それ、なんだったっけ？
そうだ。《スペース・アトラス社》の衛星だ。確か、一昨日、国際宇宙ステーションにアタック可能な軌道上にいた、二十キログラムの小さな実験衛星だったはず。
宇宙ステーションを上から見た図ではズヴェズダを中心とした予想円が描かれている。
げぇっ！
バックアップのアタック衛星があったのかっ！
やべぇよ、やべぇよっ！　大ピンチって言わねぇか？
俺たちの衛星は出払っちまってるし、もう燃料が全然ない。軌道を変えられないんだ。
どんなに頑張っても、迎え撃つなんて、できないじゃないかっ！
当たっちまう、当たっちまう。
やっこさん、なーんにも障害のなくなった宇宙空間を悠々とズヴェズダに向かって、真っしぐらに落ちて行ってやがるんだ。
小さいからって、舐めてた。これは、認めるしかない。
こっちも使うなんてな。通信不能に陥った、でかいの一機だけって前提で話を進めてたんだ。　一機でも予備で残しておけば……。
でも、それは無理だった。こっちの生産能力では、十二機が精いっぱい。余剰なんか、どう絞り出しても、なかった。
今度こそ指を咥えて、叔父さんたちが落とされるのを見てなきゃいけないのかよっ！
『たら・れば』はない。けどっ、でもっ！　わかっているけど……っ！
「にゃぁぁあぁぁあぁぁ！　到達予想時刻まで、あと三十秒」
「どわっどわっどわっ！」
これは俺。
「まずい、まずいぞぉ！」
これ、おっさん。
部屋じゅう、上を下への大騒ぎ。
で、俺は仰け反って、両手を上に伸ばしながら、ハタと気がついたんだ。
「あ、ドキャちゃん号があったじゃねぇかっ！　美愛っ、ドキャちゃん、どこにいる？」
「はにゃぁ」
『使えるものは何でも使え！』ってんだよっ。
ジャジャジャジャーン。
はたして俺らのドキャちゃん号は、宇宙ステーションのすぐそばにいた。
本当に、たまたまだぜ。
いつも宇宙ステーションの近所にいるわけじゃねぇんだから。
高度五百キロメートル。

「いい位置にいたところで、確か、すでに一回点火したんじゃなかったのか？」
そう。俺たちのロケットは固体ロケット。一回でも火を点けたら、燃料がなくなるまで止まらねぇ。一回ぽっきりの使い切りだ。
だがな、ドキャちゃん号には上と下に二個ロケットが付いてるのさ。へっへっへ。
普通は一方にしか付いてねぇだろ？
だけどな、宇宙空間では空気抵抗がない。だから、先が尖ってる必要なんか全然なくって、どんな形してたっていいんだぜ。
前に使ったのは、軌道方向に加速する向きに付いたロケット。
美愛の都合がつかなかったんで、軌道方向に減速する向きのロケットは、まだ噴かしていない。
うまい具合に、本当に本当にうまい具合に、減速して当てることのできそうな位置に、ドキャちゃん号はいた。
「わはははははは」
俺は心の底から笑った。
まだワンチャンスだけ残ってる。残ってるんだ。
正直、さっきよりも条件としては厳しい。ベータもドキャちゃん号も、減速しながらの衝突だから、進む向きが同じだ。
同じ方向に進んでいるやつに当てるってのは難しいだろ？
「最悪、サービス・モジュールへの直撃だけは避けるんだ！」
いやいや、それでも俺は当てるぜ。
「美愛、マシンの割り当て全部、こっちに回せ！」
「はいなぁ」
美愛は、ちょいちょいとコマンドを送ると、魚石さんから渡されていた衛星の仕様書（禁帯出資料！）をバラバラと捲り始めた。
あるページで止まると、立ち上がっていたノートパソコンに、何かのプログラムを走らせる。仕様書からの数字をパチパチと入れていった。
俺はキーボードを叩き出す。ドキャちゃん号とベータの現在地、進路を割り出して、ロケット噴射の方向、タイミング、攻撃コースを算出した。
ズヴェズダの中は気になる。すっげー、気になる。
叔父さん、叔父さん、叔父さん！
けど、気にしてられない。
俺たちにはやることがあるんだ。できることが残ってる。
後で知ったことだが、おっさんはヘッドフォンから聞こえてくるズヴェズダからの音が漏れないように、気を使ってくれていたらしい。
「はにゃっにゃっにゃっ！　これは、行けるかも」

美愛がコロコロと笑い出した。
ん？
「衛星が小さいから、燃料が積めてない。これまでの軌道変更でほとんど燃料が底を尽きてるかも。ＣＤカメラも、全方位チェックできるほどにはないから、死角もたくさん。今度は勝算ありだね」
な？　もう計算したのか？
超人的だな。
こっちは、元々あるプログラム動かすので精いっぱいだっての。
「もしかしたら、アルファは囮も兼ねてた可能性があるなあ」
囮にしちゃ、でかい気もする。だけど、逆にでかいから目立って、囮とも言うしな。
兼ねてたんじゃねぇの？
幾重にも折り重なった攻撃計画。憎たらしいほどに用意周到だ。
ま、今回は俺たちのほうが一枚上手だけどな。きひひひひ。
「いっ君、計算間違え、ない？　打ち間違えも」
美愛はディスプレイに映る、俺の作った攻撃計画を、にぃっと笑いながら眺めた。
「大丈夫だ」
俺はマシンから戻ってきた攻撃計画のうち、最も勝ちそうなプランを選ぶ。
「ダブル・チェックできないけど、いい？」
「ぜってぇ、間違えてねぇ」
美愛が普段から口すっぱく言っているダブル・チェック。
宇宙空間では、やり直しは利かない。
ダブル・チェックは必要だけど、今回ばかりは時間がねぇ。
一発で決めねぇと。
「よーし。いっ君を信じたよぉ。攻撃開始まで、残り二、一、点火」
俺は、ぽちっとエンターキーを叩いた。
行ってこい！

１４

望遠鏡には小さな光点が、ど真ん中で光っていた。ベータだ。
美愛の予測では、もうコース変更はできないらしい。
的とも言うけど、逆に今度は、さっきみたいに牽制が利かない。
計算誤差を考えると、掠りでもすれば、いいほうかもしれない。
俺の腹の底では、わくわくした期待があった。けど、同時に「外しちまったら」という緊張感で、ケツの底が抜けそうだった。体、ちぎれちまうかも。

当たれ。当たれ。当たれ。当たれ。
俺は、藁人形に五寸釘を打つときの呪詛ですら子供の遊びに思えちまうほど、呟きまくった。
アタックまでの十数秒が、永遠に感じられる。
「衝突予定時刻まで、あと三、二、一……」
美愛のカウントダウンが始まっても、中央の光点は移動しない。
よしっ。ベータは避けることができない。
と思ったら、目の前の光点の十分の一ぐらいの大きさの小さな点が左下から真ん中を目指してすっと入ってきた。
ベータの反射する光が、ブワッと薄く広がり、消えた。
「……」
誰の口からも、言葉は出てこなかった。
部屋じゅうシーンとなって、マシンのファンの音だけが響いていた。
「……あ、当たった……」
俺の喉からしぼり出てきたのは、たったの一言。
「はにゃぁ……」
全てのモニターから、ベータらしき光点が消えうせた。
俺たち、やったのか……？
「当たったんだよな……」
じわじわ、だけど着実に俺の中で何かが盛り上がり……、弾ける。
「いよっしゃー！　当たった！」
ガタガタガタン！
俺は、喜びのあまり、ドンと立ち上がった。その拍子に、モニターを載せていた机を、おっ倒しちまった。
ぐわっしゃん！　ばきん！　ドドドン！
机の上で組んであったモニターの壁も支えを失って、落下していく。
あー。派手に壊しちまったかもな。俺に請求書なんぞ、回さないでくれよ～。
「はにゃあああああああ。本当に当たった！」
「信じられん」
ゴチン。
おっさんは立って見てたんだが、力が抜けたように膝が折れちまって、後ろに尻もちをついちまった。
ついでに後ろの机に頭ぶつけて、コードを足に引っ掛ける。
俺の崩したモニターの山に繋がってたらしく、俺たちに向って、モニターが押し寄せてきた。
もう、しっちゃかめっちゃかだ。俺たちが衝突されたみたいだぜ。
「まさか、うまくいくとは……」

おっさん、譫言を呟いてるぜ。
てかさ、何、その信じなさ加減。うまくいくんだよっ！

15

ん？　うわっ、なんだ？
俺の腰のまわりに、温かい圧迫感がまとわりついた。
目をやると、美愛がどさくさに紛れて、しがみついていた。
美愛は、ごしごしと俺の左腰に顔をこすりつけながら、
「いっ君、すごいすごい。どんなに計算しても、本当は誤差がいっぱいなんだよぉ」
「な、なんだって！」
「だって、ＣＣＤカメラに映った光点から軌道を割り出すなんて、今の技術だと、高度によるけど、プラマイ三十メートルの観測誤差が、どうしても出ちゃうんだよぉ。だから、アルファを押し出せただけで、本当に凄いことだったんだよ。なのに、あんな小さい衛星に当てるなんて！　いっ君の山勘、ばっちりだねっ！」
美愛は、いつまでもいつまでも「すごい、すごい」と呟いていた。
や、やまかん……？
ちょっと、がっくし。
「つまり、まぐれってことか」
珍しく美愛が認めてくれているみたい。だけど、嬉しいような、全然、嬉しくないような……。
当てずっぽうより、ちょっとマシってことで褒められてもなぁ。
複雑。
「いいから、離れろ」
俺はなんだか、むかむかしてきて、美愛を引っぺがした。
「はにゃん」
なんて、美愛は膨れっ面になっている。
ん？　なんだか、横っ腹が冷たいぞ。
触ってみると、つるっと滑って、ねとーっとした液体が指先についた。
「なんだ、これ？」
いやーな予感がする。何だかわからないけど、嫌な予感。
「ああ、ごめん。ふにゃぁ」
美愛は立って行って、部屋の隅にあったティッシュの箱で鼻をかんだ。
ちーん。
美愛の鼻をかむ音と一緒に、俺の頭でも仏壇の輪の音が聞こえちまったじゃねぇかっ！

「俺に鼻水なすり付けんじゃねぇ！」
俺は美愛に一声怒鳴ると、着ていたTシャツを脱いだ。
「いやん」
「いやん」じゃねぇ、「いやん」じゃ。
ティッシュで顔半分が隠れているくせに、顔を赤らめやがった美愛を放っておいて、俺は叔父さんに会いに行った。

16

「叔父さん！」
「よお！　よく当たったなぁ。本当にありがとう」
しみじみとした口調で叔父さんは、すごく嬉しそうだった。けど、脱力したみたいに、どことなく、ぽけーっとした顔をしている。
「うん。何とか、当たった」
山勘と言われちゃ、あんまし自慢できねぇような……。
「望遠鏡のほうの映像をずっと見てたんだよ」
叔父さんは、ただ縮こまって逃げようとなんか、しないんだな。
「しっかり見てたんだ」
「ああ。当然だ」
並の神経じゃ、見てられねぇぜ。やるじゃん。
俺がしきりと感心していると、韓国人の女の宇宙飛行士が、ポニーテールをたなびかせながら近寄って来た。
いたずらっ子みたいな笑みを浮かべて、叔父さんの腰を指さして、突っついている。
なんだ？
俺が首を傾げると、すごく楽しそうな顔をして、
「彼は、本当は臆病者。あなたの衛星が当たった時、ほっとして腰が抜けた」
とだけ言って、ふわーっと行ってしまった。
へ？
俺は思わず黙って、叔父さんをマジマジと見ちまったよ。
叔父さんは、きまり悪そうに視線を逸らすと、
「無重量だから、ばれないと思ったのに……余計なことを……」
ぷっ。
確かに、体がぷかぷか浮いたんじゃ、腰抜けたかなんて、わかりゃしないけどさ。
叔父さんでも、弱いところあるんだ。

「笑うな！　それにしても悪かったなぁ、ドキャちゃん号まで使わせちまって」
「いいんだ」
「せっかく尻に敷かれて作ったってのに」
「がっ！」
なんか、むかつく。地上に戻ってきたら、飛び蹴りでもくらわせたい気分だぜ。
歯を剥き出しにして、いーっという顔を叔父さんに向けてから、
「もう、変な衛星はないはずだから」
「はっはっは。ありがとな。ところで、なんで裸なんだ？　お、おまえもしかして……」
叔父さんは突然、神妙な顔になって、続けた。
「まさかと思うが、美愛ちゃんのこと、襲ったのか？」
「へ？」
「ちゃんと初めては、ムードのあるところを選んであげなきゃ、だめじゃないかっ！」
怒られてるし。そ、そういう問題か？
「襲ってねぇ！」
どこに、そんな時間あったんだよっ！
「本当か？　お前、ちゃんとパンツ穿いてるんだろうな？」
パ、パンツ？
叔父さんは全く信じられないとでも言わんばかりに、眉を顰めて、下を覗き込むような素振りをした。
「履穿いてら！」
俺はがああっと喚くと、カメラの向きを変えて俺の下半身を映してやった。
言っとくが、俺はちゃんとズボンも穿いてるぞ。
こっちが信じられないよ。
「あ、穿いてる」
何、その、超がっかりしたような声。
「鼻水が付いただけだ」
「鼻水？」
叔父さんは怪訝そうな顔をして、「まあいい」と呟くと、
「念を押しておくが、無理やりなんて、やっちゃだめだぞ。いいのか、ちゃんと聞くんだぞ。でないと、母さん泣くぞ」
「だから、やってねぇって！」
「そうか。そうなると、今度は甲斐性の問題があるかな。心配だな」
何で、そこで甲斐性？
話ぶっとびすぎ。訳わかんねぇ。
叔父さん、興奮しすぎて、頭おかしくなってねぇか？

いい加減にしてくれ。こっちの頭が痛くなる。
ズズズン……。
静かな、だけど地を這うような、地響きに似た音が聞こえてきた。
何の音だ？　ズヴェズダに何か異常か？
「叔父さん、変な音しない？」
「いや、特にしないが……」
「じゃ、なんだ？」
砂埃がふわりと空中を舞った。
砂埃？　なんで都会のコンクリートのビルの中にある？
視界の端で、天井から細かい何かの破片が落ちてきた。
壁に斜めに亀裂が入り、床にごっという音がして罅が入る。
なんだ、なんだ、これ！　このビル、崩れるのかっ！
変な音って、俺たちかよっ！
やべぇよ、やべぇよっ！　どうすんだよっ！
何もできないうちに、床に大きな穴が空いたと思ったら。
俺たちは、どこに掴まるわけにもいかず、机だのモニターだの、ビルの構成物質とごたまぜになって、下に落ちて行っちまった。
どがちょー！

第五章　邂逅……そして

1

二〇一X年五月二三日@第二分室だった所

「ん……」

俺は目を開けた。頭の中の何か重要なところ同士が、繋がってない感じがする。

俺の存在の脈絡が、てんでわからねぇんだ。

つまり、俺が何で俯せで、しかもごつごつのものに囲まれて、押されているのかも皆目わからない。

俺、こんなところ、知らねぇし。

目の焦点がコンクリートの瓦礫に合ったとたんに、俺の頭の中がぐるりと回って、今までのことが、はっきりと思い出されてきた。

最後に見た床の大きな穴。

そういや、俺たち、落っこちたんだっけ。

なんだったんだ。

見えるところ一面、コンクリートの大きな断面から鉄骨が顔を覗かせた物とか、部屋にあった物の残骸だらけだった。

爆破って二文字が頭の中に浮かんできた。それ以外で、こんなになっちまうもんを、俺は知らねぇ。

俺は、うまく残骸と残骸の隙間に挟まっていたらしい。五体満足に動く感じがする。

首を曲げて上を見たら、綺麗な青空に白い雲が浮かんでいた。

世間さまは暢気だねっと。

ごそごそと這い出そうとしたら、瓦礫の山一つ越えたところで、知らない男の声がした。

「お前、こんなところにいたのか、ドクター・ファインアント」

モロミトスの知り合いか？　それなら、ロクな奴じゃねぇ。間違いない。

俺はできる限り音を立てないように、隙間から這い出して、山の陰から覗こうとした。

パシュッ！　パシュッ！

乾いた音が二回した。

なんだ？

俺は山の上からそっと顔を覗かせた。

うわっ。

ぱっと見えたのは、赤いシミ。えっ？　これって、血じゃねぇかよ。

何が起こってるんだ？

視線を上げて、もう少し遠くを見ると、モッシュコートを着た痩せた男が立っていた。
顔は痩け、目は落ち窪んでいる。頬には無精髭。伸びがちの髪の毛が、くしゃくしゃに絡まっていて、見るからに、不健康そうだった。手には拳銃。
男の足元には瓦礫から顔を覗かせたモロミトスの頭が出ていた。埃で顔は真っ黒。
あっ！　俺は声を上げそうになった。
モロミトスの額には、大きな穴が空いている。
両目は大きく開いたまま、もう自分で閉じることはない。
声を飲み込むことには成功したけど、動揺で体が揺れちまった。握り拳大の石がガチャガチャ音を立てながら、山を転がって行っちまった。

2

パシュッ！　パキン！
見つかった！　男の銃が火を噴いたかと思うと、俺の目の前の岩に銃弾が当たり、どこかに跳ね返って行った。
「日本国家権力の犬か」
男は山を、こっちに登ってくる。
俺は自分を隠すところを探して、辺りを見渡した。
あった！
一際ぐんと大きな柱が瓦礫からにゅっと伸びていた。あそこまで行けばっ！
俺は立ち上がり、走ろうとした。
パシュッ！　パシュッ！
痛ぇっ！
俺の脇腹を何か熱いものが通り抜けたようだった。見ると一点、赤い部分があって、血が出ている。
撃たれたんだっ！
どうしよ。どうなるんだ、俺。
今までの脅しなんかじゃない、本当の本当に、殺される！
ぞわぞわぞわっと、体の下から上に向けて、熱いものが通り抜けて行った。
「わかったら、お前は手を引け」
手を引くって、何だよ。抵抗を諦めて殺されろってことかよ！
冗談じゃない。
俺は一声「嫌だっ！」と叫ぶと、脇腹を押えながら、次にできることを必死で考え始めた。
銃口から、目を離せない。だけど、隠れなきゃいけない。足元は瓦礫で滑っちまいそうだ。
「馬鹿な」

男が拳銃を構え直そうと、腕を上げた。
また撃たれる！
俺の喉は、からからだった。目を大きく開いて、口を開け、大きく息を吸って吐いている。
切羽詰まった状況の中、俺の頭の芯が、すっと冷えて行くのがわかった。
この間から、絶体絶命になると、必ずやってくる、この感覚。
俺には、なんだかよくわかっていなかった。
時間がゆっくりに感じられて、男の上げる腕も、スローモーションのように緩慢に見える。
同時に、視界の端で行くべき柱の位置を確認、足元の状態を確かめ、踏んでいい場所、いけない場所を判断する。
たくさんの情報が頭の中を奔流となって流れていき、言語化されない思考のまま、処理されていく。
気持ちがいい。何でも見える気がする。

3

俺は銃口を見た瞬間、反射的に体が跳んでいた。
パシュッ！
発射された弾丸は、俺の左腿三センチ横を通って行った。
パシュッ！
今度は右腕の横。
ほんの一ミリの思考も、ずらしちゃいけない。ギリギリの緊張感で気分が高なる。
俺は弾丸を避けながら、後ろ向きに瓦礫の山を下っていった。
すんげー、楽しい。
スリルが高揚感を無限に高めてくれる。
腹の底から、無性に笑いたくなってきた。
今この瞬間も情報の流れは俺の頭の中を駆け抜けて。
ひゃっほう！
こんな楽しいことは、今までなかった。
体を休むことなく動かしている俺の中では、戦いの快感が衝動となって体中を突き抜けまくっていた。
この感覚、病みつきになっちまいそうだ。
戦いの快感？　……あれ？
親父（あいつ）が取り憑かれた戦場の快感って、血じゃない？
もしかして、俺の感じている、これか？
そういやぁ、河本のおっさんが親父（あいつ）のこと、『冷静な男』って言ってたし。
ずずっ。

俺は、最後に左足の踵で着地して、ずるりと体を滑らせながら、柱の陰に入ることに成功した。
「わはははははは」
なあんだ。そうだったのか。
みんな知らないから、本か何かに書いてある適当なこと言ってただけなんだ。
やっとわかった。
親父(あいつ)は殺人狂じゃない。血を見て狂ったんじゃない。
俺たちを置いて行ったどうしようもない奴だけど、それだけは違う。
親父(あいつ)に確かめたわけじゃないけど、奇妙な確信があった。
親父(あいつ)のことが、やっと少しだけわかった気がする。
俺の胸の奥のつかえが、ちょっと融けたみたいだった。
どうせ、瓦礫の山にいる拳銃を持った男は、俺がここに隠れてることぐらい知ってる。
絶体絶命だけど、楽しくてしょうがない。
俺は腹を抱えて、存分に笑った。
脇腹の銃創は、腹が振動するたびにじくじく痛いって騒いでたけどな。
よっしゃ。さてさて、どうすっかな？

4

チュイン！
俺の隠れている柱が撃たれた。
脇腹の血は止まってねぇし。こっちは手ぶらだし。てか、上半身は裸だし。
「いっく〜ん」
俺の足元から弱々しい声が聞こえてきた。
美愛！　生きてたか！
そういやぁ、俺がぴんぴんしてるから、みんな生きてると勝手に思ってた。
死んでも、全然おかしくないんだよな。
「大丈夫か？」
「まぁねぇ。足が挟まってて、出れないよぉ」
「何だって？」
どうなってるんだよ？　平気なのかよ？
「大丈夫だよぉ。でも、誰かいるの？」
「知らねぇおっさんが、銃ぶっぱなしてる。モロミトスの仲間みたいだけど、モロミトスを撃って殺した」
「で、いっ君は？」

「俺は脇を撃たれた。美愛、何か武器、持ってね？　このままじゃ、やられちまう」
美愛は、じっと何かを測るかのように、俺を見た。
「……いっ君、冷静だ」
「まあな」
「いつもみたいに、切れてない！」
「うるせぇ」
よっ、余計なんだよっ！　こんなときにっ！
「じゃ、貸すねぇ。気をつけてね」
美愛がすっと出してきたのは、銀色にきらりと光る小型の拳銃、シグ・ザウワー社製 P226 だった。
「サンキュ」
受け取った銃は、小型のくせに、ずっしり重かったぜ。
ドン！
俺は柱の陰から男に向かって、銃を構えて撃ってみた。
うおっ。こんなに反動が凄いのかよ。肩が持って行かれちまいそうじゃねぇか。
両手で撃つわけにはいかねぇ。体が全部さらされちまう。
しっかり固定できなかったせいか、俺が生まれて初めて撃った弾は、男の遙か上をすっぽ抜けて行っちまった。
音も馬鹿でかいし。向こうの銃は、サイレンサーってのが付いてるってわけか。
お巡りさんが来ちまうじゃねぇか。てか、来てくれていいのか。

5

「その撃ち方、慣れてないな」
呆れ声とも嘲笑ともつかない声が、男から出てきた。
ちっ、ばれた。
何でわかったんだ？　そんなにおどおどと撃っちまったか？
ザクザク音を立てながら、男は瓦礫の山を、俺の居場所に向かって下っている。
畜生。
俺は、やたらめったらに銃を柱から出して撃った。
ドン！　ドン！
男の肩から血飛沫が上がった。残念。銃を持っている利き腕のほうじゃない。
男が顔を歪めながら、なおも銃を構える。
やべぇ。
パシュッ！

俺は慌てて、柱に体を引っ込める。よけた横を弾が通過した。
危ねぇ、危ねぇ。
俺は柱の陰からもう一度、そっと様子を窺おうと、顔を少し出そうとしたとき。
えええええええええ？
俺は自分の鼻を疑った。風が男のほうから俺に向かって吹きつけたんだ。
何で？　何で？　何で？
頭がぐるぐるする。
嗅いだ匂いは。
六年が経って、ちょっと加齢臭が加わってたけど、まぎれもなく俺の父親の匂いだったんだ。
あの男が、親父だってのかよ。まさか。
見た目が全然、まるで違う。声も違う。体格も、記憶にあるより痩せてる。
背は……同じくらいか？　こっちの背が大きくなっちまったんで、よくわからねぇよ。
でも、美愛の一件があるんだ。見かけぐらい、ナンボでも変えられる。
でも匂いは、体臭だけは変えられないんだ。
目の前が真っ暗になった気分だ。
信じられない思いで、だけど頭の中でビンビンに響き渡る確信が、俺の口と腹筋と声帯を勝手に動かした。

6

「父さん！」
口から出てきた声は、思ってたよりもスムーズで大きくて。
男の歩く音が止まった。
俺は思わず、柱から飛び出しちまった。
パシュッ！
男は無表情に俺を撃ってくる。
「お前なぞ、知らん」
「どうして出て行った！　何で俺を撃つんだ！」
捕まえなきゃ。どうしても捕まえなきゃ。
やっと見つけたんだ。
撃っちまったよ。やべぇ。てか、俺も撃たれてるけど。
どうしたらいいんだ。
「父さんだろっ！」
「お前なぞ、知らん！」

「匂いでわかるんだっ！　父さんの匂いだ！」
男は目を細めると、ちょっと考えるように眼を動かした。
「銃を上げろ」
「え？」
「お前は父親に向かって銃を撃った。親に逆らうなど、絶対に許さん」
「はあああああ！」
そんな。親父だって知らないもん、どうしろってんだよ。
もうちょっと早くに、風が俺に向いて吹いてりゃ。っても、もう始まらねぇ。
確かに、撃っちまったもんは撃っちまった。
「俺の子だと知られて、おまえが生き延びられるとも思えん」
はいいいぃ？　なんだよ、その危ないのは。
「まさか、《天上の光》に？」
「そうだ。雇われてな。お前らのおかげで、大失敗だ」
「そんなところにいるのが悪い」
「この間、誘拐されたのがお前だと知って、途中で拷問を引き揚げさせてやったというのに」
「あああ！　俺に空っぽの爆弾つけさせやがったのは、あんたか！」
「楽々解放して、お前との間柄を疑われてもな。なのに、また、のこのこ来るとは」
「そんな問題かよっ！」
「銃を上げろ。俺たちは敵同士だ。お前は、撃たないと殺される」
親父は口の端だけ、くいっと上げて笑った。
なんでだよっ！
「ごめん」と謝るチャンスもなくて。
「銃を構えろ！」
ひでぇよ。ひでぇよ。ひでぇよ。何でそうなるんだ。
パシュッ！
俺の前に親父が撃った。足元の石が弾ける。
「構えもせんで、殺されるのか！」
うううううううう。
何を言っても無駄だ。
俺は、しぶしぶ銃を上げた。
「構え方も、全然なってない。死ぬだけだな。とにかく、お前は銃を構えた。殺されても文句ないな」
はぁっ？　あんたが構えろっつったんじゃねぇかよ。

「三、二、一」
親父はカウントダウンを始めた。
何が始まる？
考える前に俺の体が動いた。
パシュッ！
親父の銃が火を噴く。
右耳に来る！
俺は、銃を構えたまま転がった。
……あれ？　次が来ない。さっきみたいにガンガンに撃たないのかよ。
顔を上げると、俺に背を向けて、瓦礫の山を逃げていく親父がいた。
やべぇ。行っちまう。
どうしたらいいんだ。せっかく会ったのに。会えたのに。……夢にまで見た瞬間だったのに。
「行くな！」
行ったところで、どんな世界があるって言うんだ！
ドン！
俺は叫ぶと同時に、親父の太腿を撃った。
パッと血が飛ぶ。
当たった！　右腿の裏に当たった！　やべぇ、当たっちまった。
親父は遠くでバランスを崩して、転がりそうになった。
よしっ！　捕まえるぞ！
俺は走ろうとした。
追いかけるんだ！
俺が最初の瓦礫を蹴った刹那、親父は体勢を崩しながら、ポーンとお堀に飛び込んじまいやがった。
「父さん！」
俺のほうからは、親父（あいつ）の、にやりと笑った口元だけが見えた。

俺は、お堀の端まで走って行った。
けど、見えたのは水面に揺蕩う波だけで、親父（あいつ）の姿は、もうどこにもなかった。
俺は、またもや親父がどこかに行ってしまうのを、ただ見送るしかできなかった。
畜生。
「君、大丈夫か？」
俺の発砲音に気がついて、警視庁の警官が来たのは、すぐ直後だった。

第六章　エピローグ

1

二〇一X年五月二X日@ネオ第二分室

数日後、俺は第二分室に呼ばれていた。
叔父さんとは衛星回線で、お互いの無事を喜び合えていた。
第二分室は親父(あいつ)が派手にぶっ壊してくれたおかげで、近くの公園の一部に建てられたプレハブ小屋に移っていた。貧乏くせぇ。
元の建物は、未だに現場検証中だ。
早くしねぇと、誰かに重要な書類ごっそり持ってかれちまうぜぇ。
さらに安物っぽくなった銀色のドアを開ける。
ガチャッ。
俺はビシッと固まっちまった。
「よっ！　いっ君、お久〜」
うっかり閉めちまいそうになる。
ドアのど真ん前で、カマキリみたいな妙ちきりんなポーズをしてたのは、美愛だった。
待ち構えていたのかよ。
美愛の奴、ピンクを基調としたワンピースを着ていた。スカートからすっと伸びた足には包帯が巻かれていて、ちょっと痛々しい。
お洒落、してるんだよな？　何で？
でも、俺の口からは、優しい言葉なんか出てこなかった。
「おまっ！」
美愛に噛みつかんばかりに、歯を剥いてやる。
「あ・い・さ・つ！」
美愛も、迫力的には負けてない。ポーズはそのまんまで、般若のごとき形相で俺を見ている。
ふん。流されてやるもんか。
「そんなもんより、何だよ、あの荷物。誰が、あんな沢山！」
俺は美愛に言われて、美愛の『引越しの手伝い』をしに行ったのだが、前に言ったように、行った日は賃貸契約の最終日。
山のように荷物は残ってるはで、引越しの手配を全部、やる羽目になっちまったんだ。
どこが『手伝い』だよっ！　メインキャストは、俺だったよっ！

「そんなもんって言った。そんなもんって。ふん」
げしっ！
「いてぇっ！」
俺の向こう臑、蹴るんじゃねぇよ！
「罰が当たってればいいんだ！」
あちゃぁ。やべっ。
美愛の目に、なんか光るものがねぇか？
もう、怒れねぇじゃねぇか。
俺は仕方なく、美愛と同じポーズをした。
「よっ」
だからって、気合いなんか入れてやらねぇんだからな。
「別に、泣かなくても……」
「ふにゃぁ。泣いてないよっ！　あかんべー」
美愛の奴、なんか妙に必死じゃねぇか？
「えと……」
「どうしたんだ？」という俺の言葉の続きを美愛に掛けてやる前に、美愛の口が動いた。
「ありがとねぇ、いっ君」
な、何だ？　今、ありがとうとか言わなかったか？
「何のことだ？」
美愛は俺の言葉には答えず（いつものことながら、なんて自分勝手なやつなんだ）、
「これ」と、俺に白くて、ぐちゃぐちゃな布きれを差し出した。
「見つかったよぉ、いっ君の脱ぎ捨てたTシャツ」
「げっ！　美愛の鼻水、付いてんじゃん」
「そそっ！　はい」
うげぇ。せめて洗濯してからにしてくれ。てか、汚そうに指先で摘んで渡すなっ！
自分の鼻水だろっ！
「ああ」
はああ。
仕方なく俺は受け取った。鼻水どころか、土やら、瓦礫の破片やらがくっついちまっている。
どこでひっついたのか知らんが、ペンキで引っ掻いたような跡まであった。
こんなん、どうしろっていうんだよ。
俺も二本の指で挟むと、ぽいっとゴミ箱に突っ込んでやった。
お気に入りの勝負服だったのによ。

2

ごほん。
河本のおっさんの咳払いの音が、俺たちの会話を遮った。
「キンダーガーデンは、終わったかい？」
「あがっ！」
「はにゃぁ。きゃはははは」
いい加減、それ、やめてくれ。
「この間はご苦労だったね」
「事情聴取とか、まだ終わらないんすけど」
「仕方ないな。ところで、ここに呼んだのは、他でもない。聞きたいことがあるんだ」
「なんすか？」
「お父さんに撃たれた時のことなんだが」
「あのクソ親父、俺だって知って、撃ちやがった」
俺は苦々しい思いで、上と下の歯と歯をぐりぐりとこすり合わせていた。要するに、歯ぎしりっていうんだけどな。
「まぁ、それはともかく」
「と、と、と、ともかくだとっ！」
このおっさん、へらへらした顔して、何を言いだしやがるんだ。撃たれたんだぞっ！　重大事件じゃねぇのかよっ！
「柱に隠れた時のだよ」
ああ、あの時のね。って、何で知ってる？
「いや、見てたからね」
「見てた？」
信じられねぇ言葉を聞いちまった。
知ってたんなら、助けろよ。おっさんがヤバくても、俺もう助けてやらねぇぜ。
「体が挟まっててね。私も出られなかったんだ。で、どうだった？」
「は？」
意味が全然わからない。味わいを聞かれてもな。
「何か、感じなかったか？」
「殺人狂みたいなやつ？」
おっさんは仰け反った。「何だ、それは？」とか一人ごちている。
「まぁ、なんでもいい。どうだった？」
「頭ん中をいろんな情報が走って、周りが全部ゆっくりに見えて、面白かった」

おっさんは、俺の返事の全てを聞く前に、がたんと椅子から立ち上がった。
「本当か？」
「じゃなきゃ、俺、蜂の巣じゃん」
「……それはどうかな？　……わかってないのか」
おっさんはゆっくりと椅子に戻ると、ニヒルな表情になって呟いた
「つたく。俺がやるしかないのか。自分は、おいしいところだけ持っていきやがって」
何のことだ？
「私はね、君が気付くまで、まさか、あの男が勝本だとは、ついぞ思わなかったんだよ。腕の振り、狙いの付け方、全てがあいつにしては、ゆっくりだった」
「え？　俺、必死だったんだけど」
ゆっくりに見えたけど、実際には結構あれで速かったんじゃないのか？　振り返って考えるとさ。
「あいつの本気は全然、違う。もっと遙かに速い。勝本だって聞いて、全部わかった。あいつの不器用さには、ほとほと困るよ」
おっさんは「いつものことだがね……」とか呟きながら、「君もそう思わないかい？」と言わんばかりに眉を片方上げて、おどけて見せた。
「だから、何のことだよ？」
不器用？　迷惑の間違えじゃないのか？
親父（あいつ）が本気じゃなかったのはわかった。
わかったけど、やっぱり全然わからないよ。
「俺に全部、説明させるのか、全く。どこまでも自分勝手なやつだ。勝本はな、君にこの世界に入って欲しくなかったんだよ」
「なんで？」
「自分の子供が死ぬのを見たい親が、どこにいる？」
「は？　だって、あいつは俺を撃った」
俺はUボーイズというお気に入りのバンドのTシャツを捲って、真っ白な包帯でぐるぐる巻きにされた腹を出した。
血が出たんだぞ、血が。痛かったんだぞ。ほんとに。
「そう。最初は威嚇だ。痛いってことを教えるためだ。致命傷はちゃんと避けているし、現に君は自由に動けた。大した怪我じゃない」
俺は、言葉もなかった。そういえば、「手を引け」って言ってなかったか？
「そもそも、この世界に入らなければ、命の危険もない」
そりゃそうだけど。でも、突然そんなこと言われても、信じられるわけがない。だって……。
「ガンガンに俺を撃ったぜ」
おっさんは一呼吸を置くと、宥めるような口調で、

「だから、テストだったんだよ。初心者向けには、結構ハードル高かったけどな。自分と同じ能力を君が受け継いでいるか。生き延びるためのキラリと光る力を持っているか」
「力？　俺の、あの状態が？」
そんな特別な力を持ってるなんて、今まで知らなかったぞ。
「インテリジェンス・ダイビング・モードって言うんだ。実は瞑想中の高僧と同じ脳波になっている。特別なやつしか、持っていない。君は確かに、おとうさんの弾を避けて見せた。まぁ、自分の好きな時に発動できて一人前だけどな。君がこの世界を目指すなら、力があるか見極めないとならない。俺たちの世界は甘くない。だめなら、力ずくでも思い知らせて諦めさせないとならない」
親父のあの行動が、テストだって言うのか……？
全然わからないよ。
俺は、とうてい納得できない、って顔をしてたに違いない。
おっさんは机から乗り出すようにして、目をデカくした。
「テストを、わざわざテストと言ってやるやつがいるか。そんな役目、他の奴にやらせるわけがない。あいつは、とっさに手心は、親である自分が加えることにしたんだろう」
「でもっ！　銃を持てって！　敵同士だって！」
「親子殺ししろ」って、親父自身が言ったんだ。俺を銃で撃って脅しまでした。
俺は親父なんか撃ちたくなかった。そんなこと断固、したくなかった。
なのに、あいつは……。畜生。
俺は下を向いて、眉毛を八の字にした。口も知らず知らずのうちに尖っている。肩が落ちた。
「そう。どんな相手が敵でも、やらなければ、やられる。その覚悟があるか。全部、君を試したんだ。全て、君に生きてもらうためだ」
なっ！　俺は、おっさんの最後の言葉に、がばりと顔を上げた。
どこか暗かった俺の心に、光が射したようだった。
「なんてこった……。俺が生きるためだなんて……」
「勝本は戦場で生きるすべを、大事な肝を、お前に教えて行ったんだ」
「そんなのって、ありかよ……」
「はにゃにゃぁ」
それまでずっと黙って経緯を見ていた美愛の口から、ひょろひょろと細い声が飛び出した。
よろっと、手近の机に手をつく。
「親の考えていることが、そう簡単に子供にわかってたまるか。何で、あいつが《天上の光》にいるのかは皆目わからん。だが、友達として、あいつのやりたかったことは、わかるぞ」
おっさん、そんなに自慢げにならなくていいから。
「キンダーガーデンにゃ、わからんかもな。にしても、あいつは俺たちを殺さなかったことで、あまりいい立場ではなくなってると思うぞ。責任を取らされると見ていいだろう」

「そんな……」
親父、大丈夫なのか？　戻らなけりゃ、良かったんじゃないか？
何としてでも引きとめておければ。それより、親父の考えを読んで、俺が別の行動をしてれば……。
全部、取り返しがつかないことだけどな。
『たら・れば』なんて、この世にはないんだ。
「とりあえず、勝本は勝本で、よしなにやってるだろう。でだ。お父さんのテストにクリアしたからな。
まあ、私は元同僚の試験ということで、いいと思っている。君は第二分室に来るか？」
「え？」
「あいつがテストしてくれたんだ。あいつと同じ能力を持っている。スカウトしない手はないだろう。
経費削減になったからな」
って、ビルぶっ壊されたら、経費削減にはなってねぇじゃん。

俺は、ちょっと考えた。
好きな人たちのいる世界と、いない世界。
決まってるだろ？
どっち行くかなんてさ。
俺は、いるほうに行くよ。
誰がお目当てかって？　そりゃ、あんたが自分で考えたらいいさ。
「やります」
後悔なんか絶対してやらねぇ。
「はにゃ」
びっくりしたような声を出して、美愛が口を開けていた。
「命がけだぞ」
おっさんが念を押す。
逃げられるかって。
「やります」
俺はもう一度、腹の底から、しっかりと答えたんだ。

3

「げへへへへへ」
美愛？　なんだ、その笑いは？
美愛の顔が、飴細工でできてるんじゃないか、ってぐらい、ふにゃぁっと歪んだように見えた。
「いっ君、行こう！」

「あ？　どこへ？」
美愛と行く場所なんて、思いつかねぇぞ。
美愛の顔が、見るみるうちにぷーっと膨らんだ。
やべっ。何か、俺、忘れてるのか？
なんとなく、やばい気がする。
焦りまくる俺。
美愛はお構いなしに、膨らむだけほっぺたを膨らませると、
「パフェ」
と、口先だけで、俺にとって絶体絶命な宣告を下した。
来ったー！
とうとう、来た。
年貢の納め時ってやつ。お誕生日プレゼントを献上します、ってか？
「あー、あー、あー！」
「どでかパフェ。はにゃぁん」
美愛は口に出しながら、もうすでに忘我の境地にいるらしい。口から涎を垂らさんばかりの顔になっている。
ここで、垂らすなよ。
と、見てたら、やっぱり、ぽたりと雫が、口から落っこちやがった。
あほたれ―！
「早く行こ！」
「ああ」
とうとう、諭吉ブラザースの三人ほどに、羽が生えて飛んで行っちまう。
あああ！　今やっと思い出した。
確か、なんとかっていう高級な桃まで要求されてたんだ！
完全に予算オーバーだ。
俺の食う分の金なんか、全然ねぇじゃねぇかよ。
つまりだ。どでかパフェにかぶりつく美愛を目の前にして、俺は水しか飲めねぇってことなんだよっ！
極道な。
絶対、美愛の奴、うまそうな表情たっぷりで食らいつくんだぜ。
全てがありありと目に浮かんじまうじゃねぇか。
ついでに俺は、空きっ腹なんだ！
……マジ、最悪。
あーあ。とほほ。
「キンダーガーデンのガキどもは、どこへなりとも、とっとと行っちまえ！」

ちえっ。ま、しょうがないか。

おっさんの呆れ声に背中を押されるように、俺たちは遅れに遅れた美愛の誕生日とドキャちゃん号大成功のお祝いの会を開催するべく、ドアを出たんだ。

【完】